

吾衣摺有者不在高松之野邊行之者芽子之摺類會

初句は契沖に従ひてワガキヌハとよむべし。ハといふ辭入用なればなり(略解古義にはワガコロモとよめり)○第二句はワレト求メテスレルニアラズとなり○高松は上(一九四〇頁)にいへる如くタカマツとよむべし。第四句は契沖の説の如く之の下に香などを補ひてユキシカバとよむべし。ユキシカバは後世のユキシニなり(一九四七頁参照)

このゆふべ秋風ふきぬしら露にあらそふはぎのあすさかむ見む

此暮秋風吹奴白露爾荒争芽子之明日將咲見

略解に

花はさかんとするを露の重りて咲せじとするに似たればアラソフとはいふ也といひ古義に

アラソフとは花のやゝ開出むとする間に露のしげく置亂れて咲せじとするに似たればいへるなり

といへるはうらうへなり。上にも

春雨にあらそひかねてわがやどのさくらの花はさきそめにけり
とあり下にも

しら露にあらそひかねてさけるはぎちらばをしけむ雨なふりそね

とあるにあらずや。露はさかせむとし萩はさかじとして相争ふなり

秋風はずしくなりぬ馬なべていざ野にゆかなはぎが花みに

秋風冷成奴馬並而去來於野行奈芽子花見爾

朝がほは朝露負ひてさくと雖云△ゆふかげにこそさきまさりけれ

朝杲朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮

三註共にもとのまゝにてアサガホハアサツユオヒテサクトイヘドユフカゲニコ
ソサキマサリケレとよめり。本集にアサガホといへるは今いふヒルガホなる事卷
八(一五七〇頁以下)にいへる如し。さてその朝顔は夕照の頃にはしぼむものなるを
ユフカゲニコソサキマサリケレといへるは如何。藤井高尙の松の落葉卷二には
アサガホとはあしたにさくかほ花をなべていへるにてひとつの草の名にはあ

らず、まづ新撰字鏡に桔梗カラクハ又云アサガホとあるもその證なり
といひさて

萬葉集十の卷の歌にアサガホハアサツユオヒテ云々といへるも桔梗なり
といへるを神谷永平のかける松の落葉追考には

清水翁○宣昭の物語にユフガホハといふ下の一句をおとしたるにて旋頭歌な
らんといはれきめづらしくおもしろくおぼえつゝ本書を見るに旋頭歌もある
卷なればいとよくあたれるを前後短歌にて旋頭歌は別に標したれば萬葉集撰
ばれたる以前に一句をおとせるなるべし。本文に暮杲ユラガホの二字を補はまほし。暮二
字あれば見まがへおとせる事常に多し

といへり。此説よろしげにきこゆれどユフガホといふ語本集はもとより奈良朝以
前の書に見えざればうべなひがたし。齋藤彦麿の片廂卷七には

萬葉集にアサガホハアサツユオヒテ云々とある朝顔はユフカゲニサクといへ
るに迷ひて或は日あたりなき山蔭などには夕方にさく事も有べしといひ或は
槿花の一日の榮朝に咲て夕に落るといへる木槿也といへる説も有みなよくも

辨へざるおしはかり也。こは萩の歌あまたある中の一首也。朝ガホハアサ露オヒ
テ咲トイヘド此萩ノ花ハユフカゲニコソ咲マサリケレと云義也。眼前萩を見な
がらよめるなれば後世の題詠とは趣異也

といへり。即彦麿はアキハギハなどいふべき四五句の主格を略せりとせるなり。主
格を畧せる例は近くは卷九にも

明日のよひあはざらめやもあしひきの山彦とよめよびたてなくも
上にも

ぬばたまの夜ざりがくりてとほくとも妹がつてごとはやくつげこそ

とあり(卷六一二及卷七五三参照)されど此等はサヲシカハ道ハといふことを畧
せること直に知らるゝを今は上にアサガホハとあるよりそが四五までかゝれる
やうに聞えて第四句の前にアキハギハといふことを略せりとは聞えず。辭を換へ
て云はば例に引ける歌の主格は略すべく今の歌の主格は略すべからず。されば此
歌はもと

あさがほはあさつゆおひてさくといへども、あ[△]きは[△]ぎは[△]ゆ[△]ふ[△]か[△]げにこそささま

さりけれ

といふ旋頭歌なりしが神谷永平のいへる如く本集編纂以前に一句おちて短歌の形となれりしならむ。本集には旋頭歌の一句おちて短歌の形となるもの少からず。○アサツユ負ヒテの語例は卷八に

さをしかの來たちなく野の秋はぎはつゆ霜おひてちりにしものを
とあり

春去者かすみがくりてみえざりし秋はぎ咲をりてかざさむ

春去者霞隱不所見有師秋芽子咲折而將挿頭

初句は從來字のまゝにハルサレバとよめり。ハルベニハといふべき如くなれど上に春之在者スガルナク野ノホトトギス云々とあればなほハルサレバとよむべし。○咲を從來サケリとよみたれどサキヌとよみ改むべし

さぬか田の野べの秋はぎ時有着いま盛なりをりてかざさむ

沙額田乃野邊乃秋芽子時有着今盛有折而將挿頭

契沖はサヌカ田を大和平群郡なる額田として「サは例の添へたる詞なり」といへり。檜隈をサヒノクマといへるなど地名にもサを添へたる例はあり。○第三句を舊訓と古義とにはトキシアレバとよみ略解にはトキナレバとよめり。略解に従ふべし。卷七に

時ならぬまだらのころもきはしきか島のはり原時ならねども
といふ歌あり

ことさらに衣はすらじをみなべしさき野のはぎにほひて將居

事更爾衣者不摺佳人部爲咲野之芽子爾丹穗日而將居

ヲミナベシはサキにかゝれる枕辭、サキ野は佐紀野なり。卷四(七五九頁)にもヲミナベシサキ澤ニオフル花ガツミ、上一九六〇頁)にもヲミナベシサキ野ニオフルシラツツジとあり。○ニホヒテは染リテなり。將居を從來字のまゝにヲラムとよみたれど將往などの誤としてユカムとよむべきか

秋風は急之吹來はぎが花ちらまくをしみ競竟

秋風者急之吹來芽子花落卷惜三競竟

第二句はハヤクシフキクとよむべし。略解古義に之の字を久の誤としてハヤクフ
 キキヌとよみたれどさては調弱くて一首の趣にかなはず。○競竟を眞淵は競立見
 の誤としてキホヒタツミムとよみ、干蔭は竟を互見の誤としてアラソヒテミムと
 よみ、雅澄は眞淵の改字に従ひてキホヒタチミムとよめり。案ずるに竟を覽の誤と
 してキホヒテゾミムとよむべし。即風ニハリアヒテ見ハヤサムとなり。さて第四句
 のヲシミはヲシサニと譯せずしてヲシキニと譯すべし。卷七六一四二 参照

わがやどのはぎのうれ長秋風のふきなむ時にさかむとおもひて
 我屋前之芽子之若末長秋風之吹南時爾將開跡思乎

長を契沖以下みなナガシとよみたれどタケヌとよみ改むべし。○乎は手の誤なら
 む

人みなははぎを秋といふよしわれはをばながうれを秋とはいはむ
 人皆者芽子乎秋云縦吾等者乎花之末乎秋跡者將言

秋トイフ、秋トハイハムの秋は今の語にていはば秋の王なり。さてただヲバナヲと

いひて足るべきをヲバナガウレといへるは尾花の穂先の蘇芳なるが殊に目を牽
 けばなり

(玉づさの)きみが使の手折來有このあきはぎはみれどあかぬかも
 玉梓公之使乃手折來有此秋芽子者雖見不飽鹿裳

第三句を略解古義にタヲリケルとよみさて略解に「ケルは則來タルの意也」といひ
 古義には「ケルは來ケルにつづまりたるなり」といへり。ケルを來ケルの約といへる
 は上なるハヤクシフケリにつきて契沖が「フキケリのキケを反して約むればケと
 なる」といへると共に取るに足らず。キタルをケルとはいひもすべけれど(卷六一三
 頁 参照)しか耳遠く云はずともヨリ來タルといひてあるべき處なり。されば手を衍
 字としてヨリキタルとよむべし。更に案ずるにヨリキタルとありては使が折りて
 來たる事となりて結句にミレドアカヌカモとめでいへると相親しからず。されば
 手折の二字は持の誤とすべきか。然らばモチキタルとよむべし。語例は卷四に
 いたぶきのくろ木の屋根は山ちかしあすの日とりてもちまゐりこむ
 とあり

わがやどにさける秋はぎ常有者わがまつ人にみせましものを
吾屋前爾開有秋芽子常有者我待人爾令見猿物乎

第三句を略解にツネニアラバとよみ古義にツネシアラバとよめる共に非なり。舊訓の如くツネナラバとよむべし。散ラヌモノナラバとなり。語例は古今集春下にも花のごと世の常ならばすぐして昔は又もかへり來なまし

又上(二〇一二頁)にもサネワガイノチ常ナラメヤモとあり。○猿は猿を誤れるか又は猿を誤れるか。元暦校本及類聚古集には猿と書けり

手寸十名相殖之名知久いでみればやどの早芽子さきにけるかも
手寸十名相殖之名知久いでみればやどの早芽子さきにけるかも
手寸十名相殖之名知久出見者屋前之早芽子咲爾家類香聞

初句は仙覺以前の舊訓にはテモスマニとよめるを仙覺は字のまゝにタキノナへとよみ契沖干蔭も之に従ひたれどタキノナへといふ辭あるべくもあらず。寸以下を誤字としてなほテモスマニとよむべし。手モスマニは手モ休マズといふ意なり。(卷八五頁一参照)○第二句の名を略解古義に毛の誤としてウエシモシルクとよめ

り。宜しく久の誤としてウエシクシルクとよむべし。ウエシ詮アリテとなり。○早芽子は舊訓に従ひてハツハギともよむべく契沖の説に従ひてワサハギともよむべし。卷八(一五七五頁)には先芽とあり

わがやどにらゑおほしたる秋はぎをたれか標さす吾に知らえず
吾屋外爾殖生有秋芽子乎誰標刺吾爾不知所知

シメサスは札を立て、我物と領するなり。卷七(二四一〇頁)にもハヤシリテシメササマシヲ今シクヤシモとあり。アキハギヲは萩ナルヲとなり。○こは譬喩歌にて契沖の

いつく娘を守るに密によばふ男あるを聞付てよそへよめる歎
といへる如し。略解に「これは我物にせんとおもひし女を我にしらえぬやうにして人の領じたるたとへ云々」といへるは従はれず

手にとれば袖さへにほふをみなべし此白露にちらまくをしも
手取者袖并丹覆美人部師此白露爾散卷惜

ニホフは染マルなり。此白露爾とあるいぶかし。おそらくは白は置の誤ならむ。コノフル雪ノなどいへる例あり

しら露にあらそひかねて咲芽子^{サキハ}ちらばをしけむ雨なふりそね

白露爾荒争金手咲芽子散惜兼雨莫零根

第三句を従来サケルハギとよみたれどサキシハギとよむべし。すまひまけしは過去^ミの事なればなり。○上二〇八八頁にもシラツユニアラソフハギノアサカム見ムとあり

(臧孀等)ゆきあひのわせをかる時になりにつけらしもはぎが花さく

臧孀等行相乃速稻乎苜時成來下芽子花咲

略解にヲトメラガとよみ古義にヲトメドモとよみて第三句のカルにつづけりとするは非なり。ヲトメラニとよみてユキアヒにかゝれる枕辭とすべし。古義には此説を擧げて之を斥けたり。○ユキアヒノワセは略解に夏と秋と行あふころみのる早稲をいふなるべし

といへるぞよろしからむ。古人は四季はかたみにゆきちがふやうに想像せしなり。されば古今集夏部にも夏ト秋トユキカフ空ノカヨヒ路ハとよめり。因にいふ。略解には或はハギガハナとよみ或はハギノハナとよみ古義には専ハギガハナとよめり。いづれにてもあるべし

朝霧のたなびく小野のはぎが花今やちるらむいまだあかなくに

朝霧之棚引小野之芽子花今哉散濫未厭爾

こひしくばかたみにせよとわがせこがうゑし秋はぎ花さきにけり

戀之久者形見爾爲與登吾背子我殖之秋芽子花咲爾家里

略解に「夫の遠き所にすめるか、あるは旅行しなるべし」といへる如し。○卷八にこひしけば形見にせむとわがやどにうゑしふち浪今さきにけりとあると似たり

秋芽子戀不盡跡おもへどもしゑやあたらし又あはめやも

秋芽子戀不盡跡雖念思惠也安多良思又將相八方

初二を從來アキハギニコヒツクサジトとよめり。然るにそのコヒツクスといふ語、上なる七夕歌の中に年ノコヒコヒツクシテ又年ノヲ長クオモヒコシ戀ヲツクサム(二〇五二頁及二〇七九頁)とあるコヒツクスと同意にあらず。一方には本集にココロツクスといふ語を用ひたり。即卷四(七六四頁)にココロツクシテコフルワレカモ、卷七(一三九八頁)に心ツクシテワガモハナクニとあり又卷十九に

世のなかの常なき事はしるらむをこころつくすなますらをにして

とあり。よりて思ふに初二はもと秋芽子爾心不盡跡とありしを爾の畧字と心とを戀の一字に誤れるならむ。○シエヤは一種の歎辭なり。こゝなどは嗚呼といふ意にきこゆ。古義に『ヨシヤといふに近し』といへるは従はれず(卷四九七四頁參照)。アタラシは惜シなり。○又アハメヤモは來年ノ萩ノ盛ニ又逢ハムヤハ、オソラクハ逢ハセジとなり

秋風は日にけにふきぬたかまとのぬべの秋はぎちらまくをしも

秋風者日異吹奴高圓之野邊之秋芽子散卷惜裳

ヒニケニは毎日なり

ますらをの心は無而あきはぎの戀にのみやもなづみてありなむ

大夫之心者無而秋芽子之戀耳八方奈積而有南

無而を舊訓略解古義共にナシニとよめり。さて古義に『ナクテとよみてはいたくおとれり』といへり。ナクテをいにしへナシニともいひき。又而の字は集中にニにも借用ひたり。さればこの無而をナシニとよまむは可なり。現に卷五(九八八頁)にナグサムル心ハ奈之爾、卷六(一〇四五頁)にマストラヲノココロハ梨荷とあり。然も『ナクテとよみてはいたくおとれり』といへるは妄なり。卷三(三六八頁)なる梶棹モ無而サブシモ、同卷(三七二頁)なる竿梶モ無而サブシモなどの無而は古義にもナクテとよめるにあらずや。されば契沖の『無而はナクテともよむべきか』といへるぞ穩なる。○第四句のヤモは結句の下に下して心得べし。丈夫ノ身ヲ忘レテ萩ヲ戀フルニノミ拘ハリテアラムヤハとなり

わがまちし秋は來りぬしかれどもはぎが花ぞもいまださかずける

吾待之秋者來奴雖然芽子之花曾毛未開家類

ヅモのモは助辭

みまくほりわがまちこひし秋はぎは枝もしみみに花さきにけり
欲見吾待戀之秋芽子者枝毛思美三荷花開二家里

シミミニは卷三五五八頁にもウチ日サスミヤコシミミニとあり。シゲクといふことなり

春日野のはぎしちりなば朝ごちの風にたぐひてここにちりこね
春日野之芽子落者朝東風爾副而此間爾落來根

秋はぎは雁にあはじといへればか一云いへこゑをききては花にちりぬ
る

秋芽子者於雁不相常言有者香一云言有可聞音乎聞而者花爾散去流

略解に

雁の來る比はぎの散るなれば雁に逢まじきと契れるかの意にてかくいへりといへる如し。但一云言有可聞をいへルカモとよめるはわろし。いへレバカイへレ

カモは共に契レバニヤといふ意なり。○ハナニの語例は卷七一四二八頁卷八一四九八頁及一五〇二頁にあり。アダニなり

秋さらば妹にみせむとうゑしはぎつゆじも負ひてちりにけるかも
秋去者妹令視跡殖之芽子霧霜負而散來毳

卷八一六〇二頁にもツユジモオヒテチリニシモノヲとあり。○霧は露を誤れるなり

詠鴈

秋風に山跡部ヤマトヘ越ユルかりがねはいやとほざかる雲がくりつつ

秋風爾山跡部越鴈鳴者射矢遠放雲隱筒

第四句にて切りて心得べし。第二句を舊訓にヤマトビコユルとよめるを略解にヤマトへと改めて

此下に秋風ニ山飛越ル雁ガネノ聲遠ザカル雲隠ルラシといへるは此歌の一本なるべし。いづれかもとならん。これは山跡部と書たれば大倭へにて山トビコユ

ルとは異也。部は江のごとくよむべし

といへり。之に對して字音辨證下(四五頁)に部をヒとよむべしと唱へて

舊訓のまゝにて山飛越る意とすべし。此卷下に秋風爾山飛越云々とあるにおなじ。また卷十五にアシヒキノ山等妣古由留カリガネハ云々などあるをもて今も山飛越る意とすべし。、、按にこは吳原音ビユの省呼なるべし。同轉の牟をミ、久をキ、留流をリに用ゐたること古書に多し。これ同例なり

といへり。案するに下なる秋風爾山飛越云々といふ歌と第二句同一ならざるべからざる理由なく卷六(一〇六七頁)なる

あしたには海邊にあさりしゆふされば倭部越かりしともしも

の倭部越はヤマトヘコユルとよむべければ(こは辨證の著者も是認せり)今もヤマトヘコユルとよむべし

あけぐれ之朝霧かくりなきてゆく 鴈者言戀妹につげこそ

明闇之朝霧隱鳴而去 鴈者言戀於妹告社

アケグレは略解に『明方のまだほのぐらきをいふ』といへる如し。夜の明けむとして

一たび暗くなるをいふといへるは俗説なり。○アサギリカクリは外の例によらばアサ霧ニ隠レテにてアサギリガクルといふ一の動詞と認むべきなれどアケグレノを受けたればなほ朝霧とカクリと二語に分れたるものと見ざるべからず。又しか見ればアサギリの下にニを畧せりと見ざるべからず。しかもそのニを畧することは後世の語法にては許されざる事なれば明闇之とある之は或は爾の誤にあらざるかと思ふに卷四(六三四頁)なる長歌にも明晩乃且霧隱ナクタツノ、ネノミシナカユ云々とあれば之とあるは誤にあらず。そもそも集中には後世ならば省くまじきニを省ける例いと多し。○第四句の言を略解に吾の誤とせり。されど漢籍たとへば毛詩に言をワレとよませ集中にもワレ、ワガとよむべき處に言とかける例多ければ

たとへば卷十一のみにても言者シカネツ、言コヒヲラム、言ユエ人ニなどあり。下なる吾客有跡も元暦校本には言客有跡とあり

誤字にはあらず。はやく契沖も『言我也と注せり』といひ、訓義辨證下卷(三四頁)には

まづ爾雅釋詁また玉篇に言我也と註し毛詩、葛覃また彤弓の傳にも言我也とあ

り。さて欽明紀に言念^{ワレ}先祖與舊早岐和親之詞靈異記下卷訓釋に言和禮類聚名義抄に言禾^レ以呂波字類抄に言ワレなどあるをや。但此は言我其音近きによりていにしへかの國にて通し用ゐしを本邦にてもそれに習ひしなりといへり。さて言戀を略解にワガコフルとよみ古義にアガコフとよみて妹につづけたれど結句の妹につづけては調よろしからざる上に何を妹に告げよといへるにか意とほらず。されば言戀はワガコフトとよむべし。卷八(一五四〇頁)にもいとまなみ來まさぬ君にほととぎすわがかくこふとゆきてつげこそとあり

わがやどになきしかりがね雲の上にこよひなくなり國方^{クニヘカモ}可聞^{ユク}遊群

吾屋戸爾鳴之鴈哭雲上爾今夜喧成國方可聞

通本に遊群を引離ちて次の歌の題の如くに書きたれば舊訓には國方可聞を全句としてクニツカタカモとよめるを荷田東丸始めて遊群を此句に屬せる文字と認めてクニヘカモユクとよみき。一發見とたふべし

追記 校本萬葉集に據れば遊群の二字はいづれの古寫本にも引離ちて書けり。原

本に近き本の獲がたき事之にても知らるべし。従ひて本集の研究は偏に古寫本に倚頼すべからず

さをしかの妻とふ時に月をよみ切木^キ四^ツがねきこゆ今しくらしも

左小牡鹿之妻問時爾月乎吉三切木四之泣所聞今時來等霜

こゝの妻トフのトは清みて唱ふべし。切木四をカリとよむ由は卷六(一〇五八頁以下)にいへり

あま雲のよそにかりがね^{ナギ}從聞^{シヨリ}之はだれ霜ふりさむしこの夜は

一云いやますますに戀こそまさされ

天雲之外鴈鳴從聞之薄垂霜零寒此夜者

一云彌益益爾戀許曾增焉

ハダレは斑なり(卷八^{一四八}參照)。ハダレジモとシを濁りて唱ふべし。○第三句を從來字のまゝにキシヨリとよみたれどキコエシヨリ又はナキシヨリとあるべき處なり。おそらくは從聞之は從喧之の誤ならむ。さらばナキシヨリとよむべし

秋の田のわがかりばかのすぎぬればかりがねきこゆ冬かたまけて
秋田吾莉婆可能過去者鴈之喧所聞冬方設而

カリバカの事は卷四(六四二頁)に諸家の説を擧げたり。案ずるにもしカリシホ、カリ時などの意ならばワガを添へてはいふべからず。又鎌入る、所の意ならばスグとは承くべからず。さればカリバカは時にも處にも關せざる語にて、刈分の意ならむ。即こゝよりそこまではたが刈る分と定めてそをカリバカといひしならむ。而してスギヌレバは終リヌレバの意とすべし。雑誌同人第四十一に載せたる伊藤一隆氏の談話に

秋田地方の農家では一つの仕事を請負はせる風習がありこれをワツバカと申ます。給料でも中々働かないがこのワツバカだと一生懸命に仕上げる。このワツバカが一家の中でも行はれる。たとへば農家は明日は田打だといふと親爺はおれはどこの田を二枚打たう、かかアは一枚打て、總領と次男とは何枚うてと分擔をきめる。さうすると翌日は親爺は暗いうちから出かけて行つてセッセと働いて九時頃迄にはすまして歸つて来てあとは家の中にゴロゴロしたりどこか

へ遊びに行つたりして丁ふ。女房は食事の仕度もしなければならず、いろいろ家の事を片付けて出かけるから田一枚うつのでさへ夕方おそくならなければしまへない。ゝゝ、このワツバカと申す語源を御考へになりましたらどうぞ御教を願ひます

とあり。ワツバカのバカは今のカリハカのハカとおなじく、ワツバカは割分ワツバカにてカリハカはやがて稻刈のワツバカならむ。○スギヌレバはヲハリヌレバと心得べし。○カタマケテは自動詞にてチカヅキテといふことゝおもはる(卷二八頁四及卷七三頁六四 参照)

葦邊なる萩の葉さやぎ秋風のふきくる苗ナベに雁なきわたる

一云秋風にかりがねきこゆ今しくらしも

葦邊在萩之葉左夜藝秋風之吹來苗丹鴈鳴渡

一云秋風爾鴈音所聞今四來霜

サヤギはサワギなり。第四句は苗と書きたれどナベと濁りて唱ふべし。本集には濁音の語に清音の字をも借用ひたり。苗と書きたる處は上にも多し。

(おしてる)難波ほり江の葦邊には雁ねたる疑霜のふらくに
押照難波穿江之葦邊者雁宿有疑霜乃零爾

疑を舊訓及略解にはカモ古義にはラシとよめり。此字は集中にカモともよみたれ
どこゝは古義に従ひてラシとよむべし

秋風に山とびこゆるかりがねの聲とほざかる雲がくるらし
秋風爾山飛越鴈鳴之聲遠離雲隱良思

第四句にて切りて心得べし

朝爾往^チかりのなくねはわがごとく物おもへかも聲のかなしき
朝爾往鴈之鳴音者如吾物念可毛聲之悲

初句を從來ツトニユクとよめり。往は殊の誤にあらざるか。もし然らばアサニケニ
とよむべし。アサニケニは毎朝なり。下にもワガヤドノクズ葉日殊^{ヒニケニ}とかけり

たづがねのけさなくなべにかりがねはいづくさしてか雲がくるらむ
多頭我鳴乃今朝鳴奈倍爾鴈鳴者何處指香雲隱良哉

ナクナベニは鳴クト共ニなり。雁ははやく本集にしばしばカリガネといひたれど
鶴をタヅガネといはむは異様なり。されば略解には

おもふにタヅガネも雁ガネも音^ネなるがはやく其鳥の名の如くなれるなるべし
といへり。案するに下に

いもが手をとりのし池の浪の間ゆ鳥音^チ異鳴^{ケニ}秋すぎぬらし
とあり又卷二十なる長歌にタヅガネノカナシク鳴婆^ウとあればタヅガネノスル、ト
リガネノスルといふことをいにしへタヅガネノナク、トリガネノナクといひしな
らむ。もし然らば卷三四四六頁なる

あしべにはたづがねなきてみなと風さむくふくらむつをの埼はも
の第二句もタヅガネナキテと切らでタヅガネナキテと切りても心得らるべし
(ぬばたまの)夜わたる雁は鬱^{ウツクナ}いく夜をへてかおのが名をのる

野干玉之夜度鴈者鬱幾夜乎歷而鹿己名乎告

第三句を舊訓にオボツカナとよめるを略解古義にオホホシクに改めたるは却り
てわるし。なほオボツカナとよむべし。そのオボツカナは漢語の不知に當るべし○

後撰集にクル秋ゴトニカリカリトナク、聲ニタテツツカリトノミナク、カリカリトノミナキワタルラムとある如く雁はカリとなくものなれば(否カリと鳴くよりカリといふ名を負へるなり)オノガ名ヲノルといへるなり。イク夜ヲ歴テカは幾夜ツヅキテとなり○以下二首は問答なり

(あらたまの)年のへゆけばあともふと夜わたる吾をとふ人やたれ

璞年之經往者阿跡念登夜渡吾乎問人哉誰

こは雁に代りて問に答へたるなり。略解に

年経れば古き友もなくなりぬるまゝに友をいざなひわたるを問人もなきよしにてトフ人ヤタレとはよめり

といひ古義に

年の經ゆけば親しかりしも疎くなりなど、ありしにかはるならひなればそれがうれたさに心がはりのせざらむ爲己が友をさそひいざなふとて夜中に己が名をのりつゝ飛わたる吾なるものをいぶかしげに問給ふ其人は誰なるぞと釋せり。案ずるに一首の意は

カリカリと己等が名をのりつゝ、夜渡るは今は滞留久しきに亘りて歸るべき時になりぬれば友をいざなふとてなり、さるをいぶかしみて問ひたまふは誰なるぞ

となり。年ノヘユケバはただ久シクナレバと心得べし。上にも雲ノ上ニコヨヒナクナリ國ヘカモユクとありて歸雁をも此部に収めたり

詠鹿鳴

このごろの秋のあさけに霧がくり妻よぶしかのこゑのさやけさ

比日之秋朝開爾霧隱妻呼雄鹿之音之亮左

さをしかの妻ととのふとなくこゑのいたらむきはみなびけはぎ原

左男牡鹿之妻整登鳴音之將至極靡芽子原

トトノフルは卷三にも

大宮のうちまできこゆあびきすとあごととのふるあまのよび聲

とありて呼立つる事なり○結句の語例は卷二二八〇夏に

しぬぶらむ妹が門みむなびけこの山

又卷七に

妹がりとわがかよふ路のしぬすすきわれしかよはばなびけしぬ原

とあり

君にこひうらぶれをればしきの野の秋はぎしぬぎさをしかなくも

於君戀裏觸居者敷野之秋芽子凌左牡鹿鳴裳

シキノ野は磯城野なり。シヌギは押分ケテなり。○ウラブレは近くは卷七に

ゆく川のすぎゆく人のたをらねばうらぶれたてりみわの檜原は

秋山のもみぢあはれとらぶれていりにし妹はまでど來まさず

とあり。感傷などいふことなり。○下なる左牡鹿者と共に左の下に小を脱したるか。

シカは雄鹿にてヲシカのヲは添辭なればなり

鴈來はぎはちりぬとさをしかのなくなるこゑもうらぶれにけり

鴈來芽子者散跡左小牡鹿之鳴成音毛裏觸丹來

初句を舊訓と古義とにはカリハキヌとよみ略解にはカリキタリとよめり。さては

意通せず。宜しくカリノキテとよむべし。雁が來テ大事ナ萩ガ散ツタトといふ意な

り。上にも雁が來れば萩がちる趣によめり

秋はぎの戀もつきねばさをしかの聲いつぎいつぎ戀こそまされ

秋芽子之戀裳不盡者左小鹿之聲伊續伊繼戀許增益焉

ツキネバは盡キヌニなり。アキハギノ戀は萩をこふる心なり。上二一〇一頁にも

ますらをの心はなしに秋はぎの戀にのみやもなづみてありなむ

とあり。下の戀は物思なり。○イツギイツキのイは添辭なり。コエイツギイツギは類

に鹿の聲が聞ゆるなり。聲が聲に繼ぐなり。鹿の聲が萩に繼ぐにあらず。萩はいまだ

散らざるなり。略解に

秋はぎをちるまでめでし心もつきぬに其萩につづきて鳴故に云々

といひ古義に

秋芽子のちりて程も經ねばその芽子をこひしく思ふ心も未盡はてぬに鹿の聲

がつぎて聞ゆる故に云々

といへるはわろし

山ちかく家やをるべきさをしかのこゑをききつついねがてぬかも

山近家哉可居左小牡鹿乃音乎聞乍宿不勝鴨

イヘラルはスマフといふ事なり。語例は上にあり

山のへにいゆくさつをはおほかれど山にも野にもさをしかなかも

山邊爾射去薩雄者雖大有山爾文野爾文沙小牡鹿鳴母

古義に

山邊に入立てうかがふ獵人の多くあればしのび隠れて音も出さずしてあるべきに云々

といへるは従はれずもしさる意ならばオホカルヲといはざるべからず。オホカレドは多ケレドナホとなり

(あしひきの)山より來せばさをしかの妻よぶこゑをきかましものを
足日木笑山從來世波左小鹿之妻呼音聞益物乎

山ヨリ來セバは山ヲトホツテ來タラバとなり

山邊にはさつをのねらひかしこけどをしかなくなり妻のめをほり

山邊庭薩雄乃禰良比恐跡小牡鹿鳴成妻之眼乎欲焉

カシコケドはオソロシケレドとなり。妻ノメヲホリは妻ノ見エムコトヲ欲シテにて所詮妻ニ逢ヒタクテとなり

秋はぎの散去見鬱三つまごひすらしさをしかなかも

秋芽子之散去見鬱三妻戀爲良思棹牡鹿鳴母

第二句を略解にチリユクヲミテとよみ古義にチリヌルヲミテとよめり。又第三句を從來イブカシミとよめり。チリヌルミレバオホホシミとよむべし。チリヌレバはオホホシミにかゝれるにて卷三(四五七頁)にミレバトモシミとあると同格なり。オホホシミはウツタウシサニなり

山とほき京にしあればさをしかの妻よぶこゑはともしくもあるか

山遠京爾之有者狭小牡鹿之妻呼音者乏毛有香

京を略解にミヤコとよめるを古義に宣長詔詞解第五詔の

ミヤコといふは廣くわたれる名なれども其中に皇大宮ミコノミヤにあづからでただ京の内ウチのことを云にはミサトと云り

といふ説に従ひてミサトと改め訓めり。案ずるに卷三五五八頁なる長歌にウチ日サス京ミヤコシミミニ里家ハサハニアレドモとあれば少くとも歌にては宣長のいへる如きけぢめは無きなり。さればこゝもミヤコとよむべし。トモシはメヅラシなり

秋はぎの散過去者チリヌキさをしはわびなきせむな不見者ミエズともしみ

秋芽子之散過去者左小牡鹿者和備鳴將爲名不見者乏焉

第二句を略解にチリスギユケバ古義にチリテスギナバとよめり。宜しくチリスギヌレバとよむべし。今既に散過ぎぬるなり。○ワビナキセムナはワビテ鳴カムとなり。不見者は略解に従ひてミズバとよむべし。古義にはミネバとよめり。○此歌のトモシはユカシなり

秋はぎのさきたる野邊はさをしかぞ露をわけつつつまどひしける

秋芽子之咲有野邊者左小牡鹿曾露乎別乍嬌問四家類

ヌベハは野邊ニハの意なり

奈何牡鹿ナニシカ之わびなきすなるけだしくも秋野のはぎやしげくちるらむ

奈何牡鹿之和備鳴爲成蓋毛秋野之芽子也繁將落

初句を略解にはナゾシカノとよみ古義にはナドシカノとよめり。いづれにしても穩ならぬ句なり。案ずるにもとは奈何牡鹿母ナニシカノとありてナニシカモとよむべかりしを傳寫の時牡鹿の借字なるに心附かで字のままに鹿の事と心得て母を之ナニシカに改めしならむ。ナニシカモはナニシカといはむに同じ。或は云はむ。ナニシカモに牡鹿を副へたるにあらざるかと。答へて云はむ。大和物語に我モシカナキテゾ人ニコヒラレシといひて然シカに鹿をそへたる例あれどそは後世の風にて古風にあらざれば今の歌の作者はナニシカモに鹿を副へしにはあらず。さて鹿をよめる今の歌のナニシカモに牡鹿の字を借りてかけるは戯ぶれてにもあるべけれど卷十二にイマサラニ何牡鹿ナニシカオモハムとあるは全く無心にてかけるなり。○右にいへる如くなれば此歌の初二には主格を略せるなり。古歌に往々主格を略せるものあるは上にいへ

る如し○ケダシクモは或ハなり

秋はぎの開有野邊△さをしかはちらまくをしみなきぬるものを

秋芽子之開有野邊左牡鹿者落卷惜見鳴去物乎

第二句を略解にはサキタルノベノとよみ古義にはサキタルヌベニとよめり。後に定むべし○略解には

モノヲに心なし。此例外にもあり

といひ古義には

はぎの咲てある野邊に出てその花の散失なむ事の惜さに鹿の鳴ぬるものをこのおもしろき野の景色をうつくしみにいかでわが思ふ人の來座ざりけむとなり

といへり。略解の粗笨は指摘を要せず。古義はモノヲとあれば餘意あるものと認め、てコノオモシロキ野ノ云々を釋添へたるなれどもとのまゝにて古義の釋の如く聞えむやおぼつかなし。案するに此歌は旋頭歌の一句のおちて短歌の如くなれるなり。即開有野邊の下に風莫吹所年などいふ一句をおとせるなり。されば

あきはぎのさきたるぬべにかせなふきそねさをしかはちらまくをしみなきぬるものを

と復原して解釋すべし。本集には往々旋頭歌の一句のおちて短歌の形となれるものあり(一五八三頁、一五八四頁、一八〇一頁、二〇八九頁参照)○左の下に小をおとしたるか

(あしひきの)山のとかげになく鹿の聲きかすやも山田もらす兒

足日本乃山之跡陰爾鳴鹿之聲聞爲八方山田守酢兒

山のトカゲは卷八(一五二三頁)に見えたり。キカスヤモのモは助辭、キカスヤは聞キ給フヤなり。山田モラス兒は假廬作リテ山田ヲ守リ給フ人となり。語例は卷七(一三六一頁)にスミノエノ小田ヲ荻ラス子とあり○古義に

假廬に居て秋の山田を守り賜ふ其人よ、いざ物申さむ、今其山のを陰に來てなく鹿の聲をき、賜ふや、嗚呼さてもあはれなる聲にてもありしをとなり

と釋けるは從はれず。もしさる意ならばナク鹿ノ聲ヲキキツヤ山田モラス兒などあるべきなり。卷八(一五九三頁)にキキツヤト妹ガトハセルカリガネハとあり此卷

(二〇〇六頁)にホトトギスナキテサワタル君ハキキツヤ又(二〇〇七頁)キキツヤト君ガトハセルホトトギスとあるを思ふべし。こゝにコエキカスヤモといへるは聲ヲキキ給フ事アリヤといへるなり。上一九八六頁に
ほととぎすなくこゑきくやうの花のさきちるをかにくすひくをとめ
とあると相似たり

詠蟬

ゆふかげに來なく日ぐらしここだくも日ごとにきけどあかぬこゑか
も

暮影來鳴日晚之幾許毎日聞跡不足音可聞

ココダクは澤山なり

詠蟋蟀

秋風のさむくふくなべわがやどの淺茅がもとにこほろぎなくも
秋風之寒吹奈倍吾屋前之淺茅之本蟋蟀鳴毛

影草のおひたるやどのゆふかげになくこほろぎはきけどあかぬかも
影草乃生有屋外之暮陰爾鳴蟋蟀者雖聞不足可聞

略解に「物の陰に生るをカゲ草といふ」といへり。此説に従ひて影とかけるを借字とすべし

庭草に村雨ふりてこほろぎのなくこゑきけば秋づきにけり
庭草爾村雨落而蟋蟀之鳴音聞者秋付爾家里

はやく卷八(二五九四頁)にも秋ヅケバとよめり

詠蝦

三吉野乃石もとさらずなくかはづうべもなきけり河をさやけみ
三吉野乃石本不避鳴川津諾文鳴來河乎淨

カハヅは夙くしばしば出でたり。今カジカといふものなり。カジカ(河鹿)は音訓を交へたる俗語にて快からぬ語なるを近來何とも思はで歌に用ふることゝなれるはかたはらい。たし〇石は古義にイッつとよめるに従ふべし(略解にはイハとよめり)。大

石なり。さてイソモトサラズは大石ノ下ヲ離レズシテなり。○初二の續穩ならず。初句はもと吉野河とありしを後人のさかしらに改めたるにあらざるか

かむなびの山下とよみゆく水にかはづなくなり。秋といはむとや

神名火之山下動去水丹河津鳴成秋登將云鳥屋

卷八(一六二一頁)を始めて集中に山下動又は山下響とあるを從來ヤマシタトヨミとよめり。げに卷十四にウエタケノモトサへ登與美イデテイナバとあればヤマシタトヨミとよみて可なり。されど卷七なるオホ海ノイソモトユスリタツ浪ノ(一三七頁)などの例によらばヤマシタトヨミともよむべきに似たり。

卷七(一三〇九頁)なるオホ海ノミナゾコ豊三タツ浪ノは水底ガ鳴リサテ立ツ浪ノといへるなれば無論トヨミとあるべきなり

現に卷十五にヤマビコ等余米サヲシカナクモとあり。又卷八、卷九なるヤマビコ令響(又令動)も從來トヨメとよめり。されば山下動又山下響もトヨミともトヨメともよむべく、ただトヨミの時はヤマシタガと心得、トヨメの時はヤマシタヲと心得べし。○秋トイハムトヤを略解に秋トイフトテヤと譯し古義に秋ノ來リシト云コト

ヲ人ニ告知セムトテニヤと譯せり。古義に従ひて秋ト告ゲムトヤとして心得べし。中島廣足の相良日記に

友尻といふを船渡して一勝地といふにいたる、、、しばしやすらふほどかはづこゝらなくをなほこゝにてもとへばこは春の末つかた若鮎とるころもはら鳴ものにて此里人は此聲をきゝて鮎ののぼるを知るなりといふ。阿蘇の山川にては秋のはじめつ方なきて萬葉に秋トイハントヤとよめるによくかなへるを所ことなればなく時もことなるにやあらむ かはづなく時をまちえてくま人は川の瀬ごとわかゆくむなり

とあり

(草枕)たびに物念^{モラ}吾聞^{ウガキク}者^{モノ}ゆふかたまけてなくかはづかも

草枕客爾物念吾聞者夕片設而鳴川津可聞

ユフカタマケテは夕暮近クナリテとなり。上(二一〇八頁)にも冬カタマケテとあり。○二三を略解古義にタビニモノモヒワガキケバとよみたれど然よまば結句はカハヅナクナリなどあるべきなり。宜しく者を煮の誤としてタビニモノモフワガキ

クニとよむべく又三四の間にアヤニクニといふことを補ひて聞くべし
瀬をはやみ落當知足しら浪にかはづなくなり朝よひごとに

瀬呼速見落當知足白浪爾川津鳴奈里朝夕毎

第二句を從來オチタギチタルとよみたれどタルといふべき處にあらず。足を逝な
どの誤としてオチタギチユクとよむべし

かみつ瀬にかはづ妻よぶゆふされば衣手さむみ妻まかむとか

上瀬爾河津妻呼暮去者衣手寒三妻將枕跡香

第二句にて切りて心得べし。蝦を人に擬してコロモデサムミといへる、おもしろし

詠鳥

(妹が手を取)取石の池の浪の間ゆ鳥がねけになく秋すぎぬらし

妹手乎取石池之浪間從鳥音異鳴秋過良之

初句は妹ガ手ヲ取りとつづける枕辭なり。○取石池は續日本紀聖武天皇神龜元年
十月に行還至和泉國取石頓宮とあり。從來トロシとよみたれど、こゝにも續紀にも

姓氏録にも取石と書きたる上、今の歌に妹ガ手ヲといひかけたるを思へば宜しく
トリシとよむべし。そを後にトロシと訛り更にトロスと訛れるなり。○秋スギヌラ
シは秋暮レヌラシなり。鳥ガネ異ニナクといへるに初めて水鳥の聲を聞きし趣よ
くあらはれておもしろし。トリガネナクの語例は上(二一一一頁)にあり

秋の野のをばながうれになくもずのこゑきくらむか片聞吾妹

秋野之草花我末鳴舌百鳥音聞濫香片聞吾妹

片聞の誤字なる事はしるけれど宣長が片待の誤とせるは従はれず。もしカタマツ
ならば我ヲカタマツとあるべきなり。古義にはワガ待居ル吾妹ヤと譯したれどさ
る意には尙更聞えず。案ずるに片聞吾妹はおそらくは片附居妹の誤ならむ。海カタ
ヅキテ、山カタヅキテ、谷カタヅキテなどは皆海ニ、山ニ、谷ニのニを省きたるなれば
ただカタヅキラルともいひつべし。されば一首の意は秋ノ野ニ沿ヒテ住メル妹ハ
今ゴロ尾花ノ末ニナクモズノ聲ヲ聞クラムカ、アナユカシといへるなり。○舌百は
百舌の顛倒ならむ

詠露

あきはぎにおけるしら露あさなさな珠とぞみゆるおけるしら露
冷芽子丹置白露朝朝珠斗曾見流置白露

ゆふだちの雨ふるごとに一云うち春日野の尾花が上の白露おもほゆ
暮立之雨落毎零者春日野之尾花之上乃白露所念

代匠記に

夕立を昔は秋の物とせり。されど夕立と云べき雨は七月下旬までこそ降侍るを
古は仲秋の比までも云ひけるにや

といへり。仲秋ノ比マデモといへるは尾花は仲秋以後の物なればなり
秋はぎの枝もとををに露じもおきさむくも時はなりにけるかも

秋芽子之枝毛十尾丹露霜置寒毛時者成爾家類可聞

しら露と秋芽子者戀亂わくことかたきわがこころかも

白露與秋芽子者戀亂別事難吾情可聞

從來一三をアキノハギトハコヒミダレとよみたれどハとありコヒとある懸なら

す。おそろくは秋芽子花與入亂とありしを誤れるならむ。然らばアキハギノハナト
イリミダレとよむべし。さて上三句はワクコトカタキの序にてそのワクコトカタ
キは分別スルコト難キといふ意なり

わがやどのをばなおしなべおく露に手ふれ吾妹兒ちらまくもみむ

吾屋戸之麻花押靡置露爾手觸吾妹兒落卷毛將見

テフレは手ヲ觸レヨとなり

白露をとらばけぬべしいざ子ども露にきほひてはぎの遊せむ

白露乎取者可消去來子等露爾爭而芽子之遊將爲

ツユニキホヒテはアトカラアトカラオク露ニ負ケズニとなり。古義に「露のちらむ
に争ひ先だちての意なり」といへるは非なり。ハギノアソビは萩の宴なり

秋田アキタ菫カサネかりほをつくりわがをれば衣手さむく露ぞおきにける

秋田アキタ菫借廬乎作吾居者衣手寒露置爾家留

初句を從來アキタカルとよみたれどトをよみそふべし

このごろの秋風さむしはぎが花ちらすしら露おきにけらしも
日來之秋風寒芽子之花令散白露置爾來下

秋田かる^{ソホツ}荻手^{ソホツ}揺なりしら露はおく穗田なしとつげにきぬらし

一云つげにくらしも

秋田荻手揺奈利白露者置穗田無跡告爾來良思

一云告爾來良思母

第二句を舊訓にトマデウゴクナリとよめるを宣長が衣手淫の誤としてソデヒヂ
ヌナリとよみしは一發明なり。但ソデソホツナリとよまむ方まさるべし。ソホツは
集中には見えぬど武烈天皇紀影媛の歌にナキ會^ツ哀^ホ遲^ヂユクモとあれば新しき語に
あらず○露を人に擬してサウ穗田ヲ荻ラレテハワガ置クベキ處ナシト露ガ告ゲ
ニ來ルト見エテ秋田ヲ荻ル袖ガ濡レルといへるなり

詠山

春はもえ夏はみどりにくれなるの^{ミドリ}緑色にみゆる秋の山かも

春者毛要夏者緑丹紅之緑色爾所見秋山可聞

夏ハミドリニの上にミエといふ語を略せるなり○緑色を舊訓と略解とにはニシ
キとよみ古義にはマダラとよめり。卷七(一三四五夏)なる

月草にころもぞそむる君がため緑色衣すらむとおもひて
は略解にもマダラノコロモとよめり。こゝもマダラとよむべし

詠黄葉

(つまごもる)矢野の神山露じもにほひそめたりちらまくをしも

妻隱矢野神山露霜爾爾實比始散卷惜

卷二(一八七夏)にもツマゴモル^{ツマゴモル}屋上^{ヤカミ}ノ山^{ヤマ}乃とあり。矢野といふ山は諸國にあれど人
麿^ハ詩集に出でたる歌なれば出雲國神門郡のならむ

朝露に^ハ染始秋山にしぐれなふりそありわたるがね

朝露爾染始秋山爾鐘禮莫零在渡金

右二首柿本朝臣人麿之詩集出

第二句を舊訓略解にソメハジメタルとよめるを古義にニホヒソメタルに改め、さて「ソメハジメタルと訓るは甚わろし」といへり。げにこゝはニホヒソメタルとよむべし。下にもニホヒヌベクモを應染毛とかけり。されどソメハジメタルとよまむにも妨なきにあらずや。下にも今コソモミヂハジメタリケレとあるをや。○アリワタルガネは散ラズシテナガラフベクとなり

なが月のしぐれの雨にぬれとほり春日の山はいろづきにけり

九月乃鐘禮乃雨丹沾通春日之山者色付丹來

かりがねのさむきあさけの露ならし春日の山を令黃モミダスニホハスものは

鴈鳴之寒朝開之露有之春日山乎令黃物者

令黃をモミダスとよめるもの(後撰集以下)とニホハスとよめるもの(元暦校本)とあり。略解にはニホハスとよみ古義にはモミダスとよめり。いづれともよむべし。但古義に「モミダスはモミヂサスのつづまりたるなり」といへるは非なり。モミツはいにしへ四段にもはたらきしなれば(一四七六頁参照)ナルなどと同格なり。されば令散

をチラスといふが如くに令黃變をモミダスともいひつべきなり。雅澄の説の如くならばチラスもチリサスの約とせざるべからざるにあらずや。○卷八(一六〇七頁)にニホスを令丹と書けり。ニホスはニホハスに同じ

このごろのあかとき露にわがやどのはぎの下葉はいろづきにけり

比日之曉露丹吾屋前之芽子乃下葉者色付爾家里

かりがねは今者イマきなきぬわがまちし黄葉はやつげまてばくるしも

鴈鳴者今者來鳴沼吾待之黄葉早繼待者辛苦母

今者を從來イマハとよみたれどハの言耳に立ちて聞ゆ。こは漢籍に今といふことを今者ともいへるに倣ひてかけるにて意を酌みてイマシとよむべきにあらざるか。上二一〇九頁にも秋風ニカリガネキコユ今四來ラシモ、又卷十一にもホトトギス今之來ナカバとあり。○ツゲは雁ニ繼ゲとなり

秋山をゆめ人かくなわすれにしそのもみぢ葉のおもほゆらくに

秋山乎謹人懸勿忘西其黄葉乃所思君

カクナは口ニカケテ言フナとなり。オモホユラクニはシノバルルニとなり
大坂をわがこえくれば二上にもみぢ葉ながるしぐれふりつつ

大坂乎吾越來者二上爾黃葉流志具禮零乍

大坂は和名抄に大和國葛下郡大坂とあり。記紀にも見えたる處なり(記傳卷二十五
二一五一 參照。二上は山の名なり。即卷二二一九頁なる

うつそみの人なるわれやあすよりはふたがみ山をわがせとわがみむ

といふ歌の題辭に見えたる葛城、二上山なり。大坂はその北方の峠なり。今穴蟲越と
いふ。○ナガルは空より物の降る事なり。古義に「見るやうなり」と評せる如くめでた
き歌なり

秋さればおくしら露にわが門の淺茅がうら葉いろづきにけり

秋去者置白露爾吾門乃淺茅何浦葉色付爾家里

(妹が袖)卷來乃山の朝露ににほふ黃葉のちらまくをしも

妹之袖卷來乃山之朝露爾仁實布黃葉之散卷惜裳

卷來乃山を舊訓に字のまゝにマキキノヤマとよめるを宣長は來乃を牟久の誤と
してマキムクヤマとよめり。之に従ふべし

もみぢ葉の丹穗日者繁しかれども妻梨の木をたをりかざさむ

黃葉之丹穗日者繁然柄妻梨木乎手折可佐寒

第二句を従來字のまゝにニホヒハシゲシとよめり。さて略解に

紅葉せる木は多けれども妻といふ名に依てつまなしを殊更に折かざさんと也

といひ古義に

さまざまの木にうるはしき色のもみぢはしげけれどもわきて梨の木の黄色の
すぐれたるを折てかざさむとなり

といへり。モミヂセル木ハ多ケレドモ又はサマザマノ木ニウルハシキ色ノモミヂ
ハシゲケレドモといふことをモミヂバノニホヒハシゲシといふべしや思ふべし。
宜しく第二句の繁を薄の誤としてニホヒハウスシとよむべし。一首の意は

黃葉ノ色ハ薄ケレドモ妻トイフ名ヲ負ヒタルガナツカシケレバ妻梨ノ木ヲ手
折リテカザサム

といへるのみ

露霜聞さむきゆふべの秋風にもみぢにけりも妻梨の木は
露霜聞寒夕之秋風丹黄葉爾來毛妻梨之木者

初句の聞は元暦校本類聚古集などに従ひて乃の誤とすべし○ケリにモを添へてケリモといへるはめづらしこのモはユキクトミラム紀人トモシモ竹ノハヤシニウグヒスナクモなどのモとおなじき嘆辭ならむ

わが門の淺茅いろづくよなばりの浪柴の野のもみぢちるらし
吾門之淺茅色就吉魚張能浪柴乃野之黄葉散良新

ヨナバリは大和磯城郡の地名なり初瀬の東に當れり古義に

浪柴も吉隱の内にある地名なり大和志に猪飼山在城上郡吉隱村上方其野曰浪芝野とあり

といへりヨナバリノ猪飼山は卷八(二五九二頁)にヨナバリノキガヒノ岡は卷二(二一八六頁)に見えたり下にもヨナバリノ夏身ノ上とあり

かりがねをききつるなべに高松の野のへの草ぞいろづきにける

鴈之鳴乎聞鶴奈倍爾高松之野上之草曾色付爾家留

わがせこがしろたへ衣ゆき觸者にほひぬべくももみづ山かも

吾背兒我白細衣往觸者應染毛黄變山可聞

觸者は四段活に従ひてフラバともよむべしユキフルは行ク行ク觸ルルなりニホヒヌベクモは染ルベクモなり

秋風の日にけにふけば(みづぐきの)岡の木葉もいろづきにけり

秋風之日異吹者水莖能岡之木葉毛色付爾家里

岡は地名にあらず

かりがねの來なきしなべに(からごろも)たつ田の山はもみぢそめたり

鴈鳴乃來鳴之共韓衣裁田之山者黄始有

かりがねの聲きくなべにあすよりはかすがの山はもみぢそめなむ

鴈之鳴聲聞苗荷明日從者借香能山者黄始南

初二今ならばカリガネノキコユルナベニといふべく上なる

かりがねをききつるなべに高まつの野のへの草ぞいろづきにける

も今ならばカリガネノキコエシナベニといふべし。されば昔は今と物のいひざま
異なりしなり。春日ノ山野ノヘノ草を人に擬へたるにかと思へどさにはあらず

しぐれの雨まなくしふれば眞木の葉もあらそひかねていろづきにけり

四具禮能雨無間之零者眞木葉毛争不勝而色付爾家里

マキノハモは常葉木ナル檜ノ葉サヘとなり

いちじろくしぐれの雨はふらなくに大城の山はいろづきにけり

灼然四具禮乃雨者零勿國大城山者色付爾家里

イチジロクは略解にフルトイフ程と譯せる如し。○元曆校本等にこゝに註して

謂大城者在筑前國御笠郡之大野山頂號曰大城者也

といへり。又六帖に此歌を改めて

いちじろくしぐれのふればつくいななる大野の山もうつろひにけり

として擧げたり。大城山ははやく卷八(一五二七頁)に見えたり

風ふけば黄葉ちりつつ小雲吾松原は清からなくに

風吹者黄葉散乍小雲吾松原清在莫國

小雲は舊訓に基づきてシマラクモとよむべし。宣長がスクナクモとよみ改めたる
はわろし。

卷十一なるスクナクモ心ノウチニワガモハナクニは少カラズ思フ事ナルニと

いふ意なればスクナクモ清カラナクニは少カラズ清キニといふ意となるべき

をや

小は少に通じ(元曆校本などには少とあり)その少は漢籍にては暫の意につかへり

○吾松原の吾は君の誤なる事宣長のいへる如し。卷九(一八三三頁)なるツママツノ
木ハのツマとおなじく句中の枕辭なり

物もふと隱座而今日みればかすがの山は色づきにけり

物念隱座而今日見者春日山者色就爾家里

第二句を古義にカクロヒヲリテとよめるはわろし。略解の一訓に従ひてコモラヒ
ヲリテとよむべし。卷八(一五九六頁)に

あまごもり心いぶせみいでみればかすがの山は色づきにけり
とあると相似たり

なが月のしら露負ひて(あしひきの)山のもみぢむ見幕下吉

九月白露負而足日本乃山之將黃變見幕下吉

上にもツユジモ負ヒテ、アサ露負ヒテなどあり。○結句を略解古義にミマクシモヨ
ケムとよめり。舊訓に従ひてミマクシモヨシとよむべし。山ノモミヂセムヲ見ムガ
ウレシといへるなり。卷八(一六六八頁)なるミラクシヨシモと對照すべし

妹がりと馬に鞍おきていこま山うちこえくれば紅葉ちりつつ

妹許跡馬鞍置而射駒山擊越來者紅葉散筒

代匠記に馬ニ鞍オキテイクといふいひかけとし略解古義に其誤を繼げり。ユクは

初句のトの上に略せるなり。即妹ガリトは妹ガリ行クトの略なり。初二は序にあらず。○ウチコエのウチは添辭なり。古義には例の如く僻説を述べたり。○モミヂは集中に皆黄葉とかけるをこゝのみ紅葉とかけり。因にいふ。モミヅも黄、黄變などかけるが例なるに下にアキハギノシタ葉赤とかけり

もみぢする時になるらし月人かつらの枝のいろづくみれば

黄葉爲時爾成良之月人楓枝乃色付見者

第三句の月人をツキヒトノとよみ來れるを古義に月内の誤としてツキヌチノとよみ改めたるは一發見なり。卷四(七三〇頁)にも月内之カツラノゴトキ妹ヲイカニセムとあり。○初句の前に世上一般ノ草木モといふことを加へて聞くべし。月の光の清くなる事を月ノウチノカツラノ枝ノイロヅクといへる、當時にはめづらしき

技巧なり

里異霜はおくらし高松野山司のいろづくみれば

里異霜者置良之高松野山司之色付見者

初句は宣長が里を且の誤としてアサニケニとよめるに従ふべし○三四はいかによむべきか。野はいにしへヌといひてノの假字には用ひがたければタカ松ノ山ノツカサノとはよみがたきに似たり。されば契沖は野を第四句に附けてタカ松ノ野山ツカサノとよみ雅澄は之に従へり。案ずるに卷五(九〇七頁)にハルノ能ニキリタチワタリと書きて當時はやく野をノともいひしが如くなれど、なほ野をノの假字に用ひむことは穩ならず。又野山ツカサといはむも穩ならず。されば野を衍字又は乃の誤字としてタカマツノヤマノツカサノとよむべし

秋風の日にけにふけば露重はぎの下葉はいろづきにけり

秋風之日異吹者露重芽子之下葉者色付來

第三句を舊訓にツユオモミ、略解にツユヲオモミ、古義にツユシゲミとよめり。ツユヲシゲミ又はツユヲシミとよむべし

秋はぎの下葉もみぢぬ(あらたまの)月の歴去者風をいたみかも

秋芽子乃下葉赤荒玉乃月之歴去者風疾鴨

歴去者はヘケバとよむべし(略解古義にはヘヌレバとよめり)。さて月ノヘケバはただ時ガタテバといふ意なり。上(一一一)二頁にも時ガタテバといふことをアラタマノ年ノ経往者といへり。略解に「はぎの生し時より日をへて」と釋けるは辭に拘はれり

(まそ鏡)みなぶち山は今日もかも白露おきて黄葉ちるらむ

眞十鏡見名淵山者今日鴨白露置而黄葉將散

わがやどの浅茅いろづくよなばりの夏身の上にしぐれふる疑

吾屋戸之浅茅色付吉魚張之夏身之上爾四具禮零疑

第二句にて切りて心得べし。このナツミは吉野のとは別なり。ウへといへるは山なり。疑を略解にはカモとよめり。舊訓と古義とに従ひてラシとよむべし。上(一一一)〇頁にも云へり

かりがねのさむくなきしゆ(水莖の)岡の葛葉はいろづきにけり

鴈鳴之寒鳴従水莖之岡乃葛葉者色付爾來

上二一三七頁にもミヅグキノ岡ノ木葉モ色ヅキニケリとあり

秋はぎの下葉のみぢ花に繼時すぎゆかば後こひむかも

秋芽子之下葉乃黄葉於花繼時過去者後將戀鴨

繼を略解古義にツギとよめり。ツグとよみて時につづけて心得べし。黄葉ガ花ニツグ此時ガ過行カバとなり。卷八(一五六八頁)なる

よひにあひてあしたおもなみなばり野のはぎはちりにき黄葉はやつげ
と打見には相似たれど卷八なるは一般の黄葉、今のは萩の黄葉なり

あすか川もみぢ葉ながるかづらきの山の木葉者今しちる疑

明日香河黄葉流葛木山之木葉者今之散疑

葛城山は無論明日香川の水源にあらで兩者全く没交渉なればカヅラキノ山ノコノハモとあらざるべからず。者は母などの誤なるべし。○疑は舊訓に従ひてラシとよむべし

追考 山田孝雄氏(雑誌あららぎ第十六卷)は「この飛鳥川は河内國古市郡飛鳥里(○

今南河内郡駒ヶ谷村の内)の傍を流る、川なり。その川上に沿ひたる道路は古の大坂なり。水源三つのうち二つは二上嶽の西より出づ」と云はれたり。然らばフタガミノ山ノ木葉ハといふべきに似たれど二上山は卷二なるウツソミノ人ナルワレヤといへる歌の題辭に葛城二上山とありて葛城連峰のうちなればカヅラキノ山ノ木葉ハと云へるかなほ考ふべし

妹が紐解登結而たつ田山今こそみぢはじめたりけれ

妹之紐解登結而立田山今許曾黄葉始而有家禮

初二がタツにかゝれる序なる事は明なり。第二句を舊訓にトクトムスビテとよめり。されどさては解しがたきによりて契沖千蔭雅澄共に後撰集に

妹が紐とくとむすぶとたつ田山今ぞもみぢの錦おりける

とあるに従ひて結而をムスブトの誤とし字音辨證上卷(二六頁)には而のまゝにてトとよむべしとして

而をトに借れるは轉音を用ゐたる也。而にトの音あるは同轉の治にト、姫にコ、忌にゴ、志之にソ、以にヨ、意矣にオの音ある響也云々

といへり。案ずるに初句に妹ガヒモとあれば解くも結ぶも我の所爲なり。されば右の訓に従ひてタツまでを釋すれば妹ガ紐ヲワガ解クトテ立チワガ結プトテ立ツといふことゝなるなり。さて通せむや思ふべし。奥儀抄には

はかまのこしは結ぶとてもたちとくとでもたてばトクトムスプトタツ田山とつづくるなり

といへりといふ。此釋の如くならばトクムスプタツの主格を妹とせざるべからざれど妹ガソノ紐ヲといふことをイモガ紐といふべきならむや又思ふべし。おそらくは第二句の解は率などを誤れるにてイモガヒモイザトムスビテタツ田山とよむべきならむ。即男の起きて歸るとして俗信に従ひて女の紐を結びて出立つといふ意の序なり。○四五はモミヂハジムといふ語を二句に割けるなり。範とすべからずかりがねの喧^{ナキニシヒ}之^ヒ△^ヒ從^ヒかすがなる三笠の山はいろづきにけり

鴈鳴之喧之從春日有三笠山者色付丹家里

第二句は契沖が日の字を補ひてナキニシヒヨリとよめるに従ふべし。上二一三三七頁にも

かりがねの來なきしなべにから衣たつ田の山はもみぢそめたりとあり

このごろのあかとき露にわがやどの秋のはぎ原いろづきにけり
比者之五更露爾吾屋戸乃秋之芽子原色付爾家里

第四句なつかしからず。上二一三三三頁なる

このごろのあかとき露にわがやどのはぎの下葉はいろづきにけり
を傳へ誤れるならむ

ゆふされば鴈のこえゆくたつ田山しぐれに競^{サカ}いろづきにけり

夕去者鴈之越往龍田山四具禮爾競色付爾家里

キホヒはハリアヒテなり。古義に「しぐれのふるに否うつろはじと争ふにつひに争ひ得ずして」と釋せるは上なるアラソヒカネテと混同せるなり。競を略解にキノヒとよめるはわろし

さよふけてしぐれなふりそ秋はぎのもと葉の黄葉ちらまくをしも

左夜深而四具禮勿零秋芽子之本葉之黃葉落卷惜裳

モト葉は下葉におなじと略解にいへる如し

ふるさとののはつもみぢ葉をたをり以^{モチ}而^{シテ}けふぞわが來^クみぬ人のため

古郷之始黃葉乎手折以而今日曾吾來不見人之爲

以而の而の字元曆校本及類聚古集に無し。而を削りてモチとよむべし。○來を古義にコシとよみたれどなほ舊訓の如くクルとよむべし

君之家乃之黃葉早者落しぐれの雨にぬれにけらしも

君之家乃之黃葉早者落四具禮乃雨爾所沾良之母

第二の之の衍字なる事は明なり。者落は一本に落之者とありといふ。略解古義共に之に従ひてモミヂバハヤクチリニシハとよみたれどチリニシハにてはヌレニケラシモとの照應よろしからず。おそろくは落來の誤ならむ。さらばモミヂハハヤクチリニケリとよむべし。モミヂハのハは辭なり

一とせにふたたび行かぬ秋山乎^{アキヤマ}ころにあかずすぐしつるかも

一年二遍不行秋山乎情爾不飽過之鶴鴨

ユカヌは來ヌなり。第三句を從來アキヤマとよみたれどアキノヤマとノを挿みてよむべし。一トセニフタビユカヌは秋のみにかゝれるなればなり。○ヲはナルヲなり。ココロニアカズは十分ニ賞玩セズシテなり。スグシは秋ヲスグシなり

詠水田

(足曳)山田つくる子ひでずとも繩^{ヒナ}だにはへよもるとしるがね

足曳之山田佃子不秀友繩谷延與守登知金

和名抄に漢語抄云水田古奈太とあり。新撰字鏡には墾をコナタとよめり。和訓栞に「倭名抄に水田をよむは熟田の義也」といへり。○ヒデズは穗ニ出デズなり。穗ニ出ヅを略してホイヅといひ更にそれをつづめてヒヅといふなり。モルトシルガネは人ノ守ルト知ルベクとなり。眞に田を詠せる歌ならば第五句の如き無用の辭は費さじ。されば略解に

譬喻歌なり。、、今はまだをさなくとも今より領じたりと知られんといふを

そへたり

といへる如し。卷七(一四二一頁)に

いそのかみふるのわさ田をひですともしめだにはへてもりつつをらむ
とあるも譬喩歌なり

さをしかの妻よぶ山のをかべなるわさ田はからじ霜はふるとも

左小牡鹿之妻喚山之岳邊在早田者不刈霜者雖零

契沖千蔭雅澄ともに鹿ガ早稻田ノ陰ヲ便トスレバとやうに釋きたれどさる意は
歌に見えず。又山には草木あるべければ早稻田の陰を頼とはすべからず。案ずるに
こはワサ田ヲ刈ラバ鹿ガオドロクベケレバといへるなり

わが門にもる田をみれば沙穂サホの内の秋はぎすすきおもほゆるかも

我門爾禁田乎見者沙穂内之秋芽子爲酢寸所念鴨

初二は我門ニ穂ニ出デテ人ノ守ル田ヲ見レバとなり。サホノ内は近くは上(一九一
五頁)に

かすがなる羽買の山ゆさほの内へなきゆくなるはたれよぶ子鳥
とあり。佐保の郷内なり。オモホユルカモはシノバルルカナなり

詠河

ゆふさらずかはづなくなるみわ河の清き瀬の音をきかくしよしも

暮不去河蝦鳴成三和河之清瀬音乎聞師吉毛

キカクシヨシモは聞クガウレシとなり

詠月

天の海に月の船うけ桂梶かけてこぐみゆ月人をとこ

天海月船浮桂梶懸而撈所見月人壯子

カツラカデは楚辭九歌の桂カキ權を譯せるにて略解に「月中の桂の縁もあればかくよ
めり」といへる如し。卷七(二一九頁)に

天の海に雲の波たち月の船星の林にこぎかくる見ゆ

とあると相似たる所あり

この夜らはさよふけぬらしかりがねのきこゆる空ゆ月たちわたる
此夜等者沙夜深去良之鴈鳴乃所聞空從月立度

卷九(一七〇七頁)なる

さよ中と夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月わたるみゆ
のかはれるにて到底原歌に及ばず

わが背子が挿頭之はぎにおく露をさやかに見よと月はてるらし
吾背子之挿頭之芽子爾置露乎清見世跡月者照良思

第二句を略解にカザシシとよめるはわろし。古義に

此は酒宴などの興に依て芽子をかざせる人のあるを見てよめるなるべし
といへるはよき心づきなり。ワガセコガとあれど男子のよめるならむ。男子ども
ワガセコといひし事ははやくいへる如し

心なき秋の月夜の物もふといのねらえぬにてりつつもとな
無心秋月夜之物念跡寐不所宿照乍本名

ツク夜はやがて月なり。句をおきかへて

物もふといのねらえぬに心なき秋のつく夜のてりつつもとな
として心得べし。テリツツモトナはアヤニクニ照リツツとなり

おもはぬにしぐれの雨は零有跡あまぐもはれて月夜清鳥
不念爾四具禮乃雨者零有跡天雲霽而月夜清鳥

第三句を従来フリタレドとよみたれど零來跡の誤としてフリケレドとよむべし。

清鳥は契沖以下サヤケシとよみたれどキヨシモとよむべし。四五は雨前より却
りて月光の清き趣なり。略解古義にオモハヌニをアマグモハレテにかけて釋きた
るは非なり。句のままに心得べし。○鳥は焉の俗體なり

はぎが花さきの乎再入を見よとかも月夜のきよき戀まさらくに
芽子之花開乃乎再入緒見代跡可聞月夜之清戀益良國

略解に乎再入をヲヲリとよめるはよろしけれど再を鳥の誤とし雅澄が之に同意
したるは誤れり。はやく守部の鐘の響第四十段に「乎再は乎字を再び重ねたる義を

以て書るなり」といひ、又訓義辨證下卷三五頁に

古書に再讀すべきをりは其文字をば復書せずして其字の下に二ノ字を小書せり。皇國にても古へ專此法を用ゐて二とも、とも、々ともかけり。とは二の草書なるべし。々は全、字の草體ならむ。これらの書法によりて思へば乎乎入を乎再入とかける事よしありていとおかしくさへおぼゆるなり

といへり。此等の説の如し。播磨國風土記に田田利を田又利と書けり。○さてサキノヲヲリは卷八(一四八六頁)に

はる山のさきのををりにはる菜つむ妹がしら紐みらくしよしも

とあり。こゝにてはサキナビケルサマヲと譯すべし。○戀マサラクニは妹ヲシタフ心ガマサルニとなり。略解に其花ヲ戀メヅル心ノ増ルニと譯したるは従はれずしら露を玉になしたるなが月のありあけの月夜みれどあかぬかも

白露乎玉作有九月在明之月夜雖見不飽可聞

玉ニナシタルは玉ニ變ジタルなり

詠風

こひつつも稻葉かきわけ家居者ウケガともしくもあらず秋のゆふ風

戀乍裳稻葉搔別家居者ウケガ乏不有秋之暮風

第三句は字のまゝならば古義の如くイヘヲレバとよむべし。家居シヲレバの意なり。上(一九一〇頁)にも

梅の花さける崗邊にいへをればともしくもあらずうぐひすのこゑ

とあり。さて案ずるにコヒツツ家ヲルとあるもイナ葉カキワケ家ヲルとあるも共に穩ならず。第三句はもと我來者などありしを原本の文字のさだかならざりしを讀分くとて上に家居者トモシクモアラズとあるよりそれに准じて家居者としたるにあらざるか。もし我來者の誤ならば一首の意は

殘暑ニワビ風ニコヒテ稻葉ヲ搔分ケツツワガ來レバ秋ノ夕風ハ少クモアラズ

といふ意とすべし

はぎが花さきたる野邊にひぐらしのなくなるなべに秋の風ふく

芽子花咲有野邊日晚之乃鳴奈流共秋風吹

日グラシノ聲ノキコユルニツレテとなり。上にもカリガネヲキキツルナベニ、カリガネノ來ナキシナベニ、カリガネノ聲キクナベニなどあり

秋山の木葉も未赤者イナダモミデネバけさふく風は霜も置應久オキスベク

秋山之木葉文未赤者今日吹風者霜毛置應久

未赤者を舊訓と古義とにはイマダモミデネバとよみ略解にはモミデネバとよめり。モミデネバとよめるは上二段活とせるにてモミデネバとよめるは下二段活とせるなり。古今集にシラツユノ色ドル木々モミデアヘナクニ、モミデツツウツロヒヌルヲ限トオモヘバ、ツヒニモミデヌ松モミエケレなどあれば上二段活としてこゝもイマダモミデネバとよむべし。さてモミデネバはモミデヌニなり。○置應久を舊訓と古義とにはオキヌベクとよみ、略解には久を之の誤としてオキヌベシとよめり。もとのまゝにてオキヌベクとよむべし。オキヌベクアル事ヨといふ意にて卷九(一七二四頁)なる

見まくほりこしくもしるく吉野川おとのさやけさみるにともしく
のトモシクと相似たる格なり

詠芳

高松のこの峯もせに笠立カサダテ而、盈盛ミチサカリタル有、秋の香のよさ

高松之此峯迫爾笠立而盈盛有秋香乃吉者

玉勝間卷十三「梅の花の歌に香をよむ事」といふ條全集第四の三〇一頁に此歌を擧げて

こは松茸をよめるにぞ有ける。はしに詠芳とある芳字は茸を寫しひがめたるなり

といへり。○第三句を舊訓と略解とにはカサタチテとよみ、宣長と雅澄とはカサタチテとよめり。笠ヲタテテといはむよりは笠トタチテといはむ方穩なればカサダチテとよむべし(タは濁るべし)。○盈盛有を從來ミチサカリナルとよみたれどミチテサカリナルといふことをテを省きてミチサカリナルとはいふべからず。さればミチサカリタルとよむべし。○秋、香は茸の歌語ならむ。語のまゝに香の事としてはカサダチテと相副はず

詠雨

一日ちへしくしくにわがこふる妹があたりにしぐれ零禮見
一日千重敷布我戀妹當爲暮零禮見

右一首柿本朝臣人麿之歌集出

初句は古義の如くヒトヒニモとよむべし(舊訓と略解とにはヒトヒニハとよめり)
一日ノ中ニモ幾百遍トナクとなり○結句を舊訓にシグレフレミムとよめるを略
解に禮を所の誤としてシグレフルミュとよめり此説に従ふべし(字音辨證には例
の如く禮をルともよむべしといへり)第三句に辭を補ひてワガ戀ヒテ見遣ルとし
て心得べし

秋田^{アキタ}刈^キたびのいほりにしぐれふりわが袖ぬれぬほす人なしに
秋田^{アキタ}刈^キ客乃廬入爾四具禮零我袖沾干人無二

略解古義に「かりそめにをる所をタビといふべし」といひたれど秋の田の番小屋に
居る事を旅とはいふべからず初句の秋田刈はおそらくは秋野行の誤ならむ

(たまだすき)かけぬ時無吾戀△しぐれし者^{ウラ}者ぬれつつもゆかむ
玉手次不懸時無吾戀此具禮志者者沾乍毛將行

カケヌ時無は心にかけてぬ時なきにて即思はぬ間なきなり○二三を略解古義にカ
ケヌトキナキワゴヒヲとよみて吾戀ナルモノヲの意としたれどさては辭足ら
ず案するにこはもと旋頭歌にて吾戀の下に吉哉などありしにて

たまだすきかけぬ時なくわれはこふるをよしゑやししぐれしふらばぬれつつ
もゆかむ

とよむべきなりしならむ妹が許に行かむとするをりしも空のけしきしぐれぬべ
くなりしかばヨシヤ時雨ニヌレテモ行カムといへるなり○上の者は零を誤れる
なり

もみぢ葉をちらすしぐれのふるなべに夜副衣寒ひとりしぬれば
黄葉乎令落四具禮能零苗爾夜副衣寒一之宿者

第四句を舊訓にヨサヘヅサムキとよみ類聚古集などには夜副衣をフスマとよみ

又ヅをよみそへてフスマヅサムキとよめり。さて契沖千蔭は舊訓に従ひ雅澄は『ヨサヘヅサムキとよみてはサへの詞平穩ならず』といひて一訓に従へり。古義の説よろし

詠霜

あまとぶや鴈のつばさの覆羽のいづくもりてか霜のふりけむ
天飛也鴈之翅乃覆羽之何處漏香霜之零異牟

略解に

雁はあまた羽打ひろげてつらなり飛ものなればかくをさなくよめり
といひ古義に

天を高く飛渡るあまたの雁の翅をひろげならべたればそれにさへられて霜は
得ふるまじき理なるに云々

といへるは未徹底せず。いかに雁の多く渡ればとて夜すがら絶間なく渡るものに
あらず又空もせに渡るものにあらず。誇張は詩歌の常とはいふとも霜の漏りて降
るべき空間も時間もなき趣によむべけむや。案するにこは雁の聲をきし端に木

草などに霜のきらめくを認めし趣にて其霜をただ今ふりしものと假定して

今眞上ヲ連ッテ通ッタ雁ノ翼ノドコヲ漏レテ此霜ハフツタノデアラウカ

といへるなり。○オホヒ羽はやがて翼の事なり。されば翅乃のノは例のニシテ又の
意なるノなり

秋相聞

○

あき山のしたびがしたになく鳥の音△聞なにかなげかむ

金山舌日下鳴鳥音聞何嘆

シタビは紅葉のかがやく事なり(卷二〇三頁参照。略解にアキ山ノを枕辭とせるはい
みじき誤なり。上三句は序なり。ナク鳥ノヤウナ聲ヲナリトモといへるなり。○元暦
校本にも類聚古集にも音の下に谷の字あり

たぞかれと我をな問ひそなが月の露にぬれつつ君まつ吾を

誰彼我莫問九月露沾乍君待吾

タヅカレは彼ハ誰ゾとなり。タヅとソを濁りてよむべし。君といへるは我ヲナトヒソといへる相手にあらず。第三者なり。結句のワレヲは我ナルニとなり

秋夜きりたちわたりオホホシク夙夙いめにぞ見つる妹がすがたを

秋夜霧發渡夙夙夢見妹形矣

初句を從來アキノヨノとよめり。宜しくアキノヨニとよむべし。初二は序なり。○夙夙を略解古義に凡々の誤としてオホホシクとよめり

秋の野の尾花がうれの生オホホシク靡心は妹によりにけるかも

秋野尾花末生靡心妹依鴨

略解に生を打の誤として第三句をウチナビキとよめり。之に従ふべし。但「上はヨル」といはん序のみ」といへるは非なり。序は初二のみ。卷四六三二頁にもウチナビキヨ

コロハ君ニヨリニシモノヲとあり

秋山霜ふりおほひ木葉ちりトホク歳トホク雖行我忘八

秋山霜零覆木葉落歳雖行我忘八

右柿本朝臣人麿之歌集出

初句を從來アキヤマニとよめり。アキヤマヲとよむべきに似たれど下にササノ葉爾ハダレフリオホヒまたヨナバリノ野木爾フリオホフシラ雪ノとあればなほアキヤマニとよむべし。○四五は舊訓にトシハユクトモワレワスレメヤとよめるに従ふべし。略解にトシハユケドモワレワスルレヤとよみ改めたるはいみじき誤なり。○一首の意は契沖のいへる如く秋山の紅葉を女の盛にたとへてタトヒ年老ユトモ我ハ忘レムヤといへるなり

寄水田

すみのえの岸を田にはりマキシイネヒデ蒔稻乃而及カルマデ蒔あはぬきみかも

住吉之岸乎田爾墾蒔稻乃而及蒔不相公鴨

宣長のいへる如く乃を秀の誤として三四をマキシイネヒデテカルマデとよむべし

(たちのしり)玉纏田井タマツクにいつまでか妹をあひみず家ウツガこひをらむ

釵後玉纏田井爾及何時可妹乎不相見家戀將居

初句は枕辭なり。珠玉を劍鞘に飾る事あれば玉纏の枕辭とせるなり。玉纏田井を舊訓にタママクタキとよめり。此訓に従ひて略解に

纏田居マツタキといふ地に玉マクといひ下したり

といひ、古義には

稻種を蒔く田と云なるべし。稻種を玉といふことは一説あるによれり。其事はやく云り(○卷三なるアラタマノ年アルマデニの下に「タマノは田物か田實之かの意にて稻實をいふならむ」といへり)

といへり。又契沖は

此玉纏は地の名ときこえたればタママキノタキなるべきにや

といへり。案ずるに穂田にしげく露のおきたるを玉と看做して玉撒ク田居といへるにあらざるか○略解に

是は班田使などにて其田居に月を経てよめるならん

といへるは非なり。假廬を結びて穂田を守る趣なり。さればこそ秋相聞には入れたるなれ○結句の家は我の誤ならむ

秋の田の穂の上におけるしら露のけぬべく吾はおもほゆるかも

秋田之穂上爾置白露之可消吾者所念鴨

上三句は序なり。卷八(一五九四頁)にも

秋づけば尾花が上におく露のけぬべくも吾はおもほゆるかも

とあり

秋の田の穂むきのよれる片よりに吾は物もふつれなきものを

秋田之穂向之所依片縁吾者物念都禮無物乎

はやく卷二(一六三頁)に

秋の田の穂むきのよれるかたよりに君によりななこちたかりとも

とあり。初二は序なり。君ハツレナキニ我ハ君ニ心ヲ傾ケテカク物ヲゾ思フといへるなり

秋田^{アキタ}叫^{カキ}かりほをつくりいほりしてあるらむ君をみむよしもがも

秋田^{アキタ}叫^{カキ}借廬作五百入爲而有藍君叫將見依毛欲將

初二もとのまゝならばアキノタヲカリホヲツクリとよむべけれど叫は刈を誤れるならむ。秋ノ田ヲ刈ルをカリホにいひかけたるにあらじ。さて初句を略解にアキタカリとよみ古義にはアキタカルとよめり。トを添へてアキタカルトとよむべき事上二二九頁なる秋田刈カリホヲツクリワガヲレバの處にいへる如し。こは穂田を守る人の妻のよめる趣なり。○將は得を誤れるなり

たづがねのきこゆる田井にいほりして吾客^{ワレイタク}有跡妹につげこそ

鶴鳴之所聞田井爾五百入爲而吾客有跡於妹告社

上にいへる如く番小屋すまひをタビとはいふべからざる上、イホリシテワレタビナリトとはいふべからず。されば客有を家戀の誤としてワレイヘコフトとよむべし。さてツゲゴツといへるは道ゆく人などにあつらへたるなり。春霞たなびく田居に廬^{イハ}付^{ツキ}而秋田^{アキタ}かるまで思はしむらく

春霞多奈引田居爾廬付而秋田刈左右令思良久

第三句を舊訓にイホリシテとよめり。略解古義には之に従ひて付を爲の誤とせり。案ずるにもしイホリシテとよむべくばイホリシソメテといはざるべからず。否春季に假廬すまひをする事はあるべからず。されば廬付而を種蒔而の誤としてタネマキテとよむべし。○オモハシムラクは物思ヲセシムル事ヨとなり。女を思始むるより事成るまで物思の絶えぬを農夫の劬勞の間斷なきに譬へたるなり

(たちばなを)守部^{モリベ}乃五十戸^{イソト}之門田^{カドノ}わせ^{ワセ}刈^カる時^{トキ}すぎぬ^{スギヌ}こじとすらしも

橘乎守部乃五十戸之門田早稻刈時過去不來跡爲等霜

初句はタチバナヲ守ルとかゝれる枕辭なり。守部は地名とおぼゆれど所在知られず。○五十戸は古義にいへる如く里の借字なり。戸令に凡戸以五十戸爲^{キヨ}里とあり。はやく卷五九六七頁にサトヲサを五十戸長と書けり。○四五は刈ル時スギヌルニ刈リニ來ザルハ來ヌツモリニヤとなり。こは譬喩歌にて女の生長せば娶らむと契りし人の約を果さぬをおぼつかなみたるなり

寄露

秋はぎのさきちる野へのゆふ露にぬれつつ來ませ夜はふけぬとも
 秋芽子之開散野邊之暮露爾沾乍來益夜者深去軀
 色付相秋のつゆじもなふりそね妹がたもとをまかぬこよひは
 色付相秋之露霜莫零妹之手本乎不纏今夜者

初句を從來イロヅカフとよみて略解には

色ヅカフは色ヅクを延言也、露霜をいはん爲のみ

といひ、古義には「イロヅカフはイロヅクをのべたる詞也」といひて草木ノ葉ノ色付
 ワタル秋ノ露霜ハ云々と釋したれど本草ノ色ヅク露といふことを色ヅカフ秋ノ
 ツユジモとはいふべからず。おそらくは誤字あらむ

秋はぎの上におきたるしら露のけかもしなまし戀爾あらずば
 秋芽子之上爾置有白露之消鴨死猿戀爾不有者

爾の字、元曆校本の傍書に乍とあり。此歌ははやく卷八(一六二〇頁)に出でて弓削皇

子御歌とあり。上三句は序、四五は戀ヒツツアラムヨリハ消エヤセマシとなり。下に
 四五今とおなじき歌二首あり

わがやどの秋はぎの上におく露のいちじろくしも吾こひめやも
 吾屋前秋芽子上置露市白霜吾戀目八面

上三句は序なり。略解に「顯れては戀じといふ也」といへる如し

秋の穂をしぬにおしなべおく露のけかもしなましこひつつあらずば
 秋穂乎之努爾押摩置露消鴨死益戀乍不有者

秋ノ穂は稻、シヌニはシナフバカリニなり。上三句は序なり

露霜にころもでぬれて今だにも妹がりゆかな夜はふけぬとも
 露霜爾衣袖所沾而今谷毛妹許行名夜者雖深

今ダニモは今カラナリトモなり(二〇三七頁参照)

秋はぎの枝もとををにおく露のけかもしなましこひつつあらずば
 秋芽子之枝毛十尾爾置露之消毳死猿戀乍不有者

秋はぎのうへに白露おくごとに見つつぞしぬぶ君が光儀を
秋芽子之上爾白露每置見管曾思努布君之光儀乎

略解にハギノ上ニ露オキテタワメルヲ見テモ云々と釋せるは非なり。露ノオキテ
カガヤクヲ見ル毎ニといふ意なり。第二句の調よろしからず○集中に光儀と書け
るを略解古義には皆スガタとよめり。げに卷二なる

なにはがたしほひなありそねしづみにしいもが光儀をみまくくるしも
又此卷なる

いささめにいまもみがほしあきはぎのしなひてあらむいもが光儀を
は必スガタとよむべけれどこゝなるは露を見て容貌を憶ふにはあらで古事記に
アカダマハ緒サヘヒカレドシラタマノキミガ余曾比シタフトクアリケリとある
如き裝飾の白玉を憶ふなればスガタとよまでヨソヒとよむべきに似たり。或は云
はむ。同じ書の中にて同じ字を或はヨソヒとよみ或はスガタとよまむはいかがと。
答へて云はむ。げに然り。されど集中には同じ字を二様にも三様にもよませたる例
あり。たとへば何怜はウマシとよむべきと、アハレとよむべきと、オモシロシトよむ

べきとあり。又委曲はヨクとよませたるとツバラカニとよませたるとありと

寄風

わぎもこはきぬにあらなむ秋風のさむきこのごろしたに著ましを

吾妹子者衣丹有南秋風之寒比來下著益乎

二三の間にモシ衣ナリセバといふことを挿みて聞くべし

はつせ風かくふく三更者いつまでかころもかたしきわがひとりねむ

泊瀬風如是吹三更者及何時衣片敷吾一將宿

三更はヨヒとよむべし。從來ヨハとよめり。さて三更者とあるを舊訓にヨハハとよ
みたれどハの言おちつかざるによりて略解には「者は乎の誤ならん」といひ、文字辨
證下卷(四三頁)には煮の略字としてニとよめり。略解の説に従ふべし。○衣片敷は集
中になほ

妹が袖別れし日よりしろたへの衣かたしきこひつつぞぬる(卷十一)

わかれにしいもがきせてしなれごろも、そでかたしきて、ひとりかもねむ(卷十五)

長歌

とあり。身を衣に包みて寐るにて俗にカシハ餅といふさまにするなり。但卷八(一五五七頁)に

あまとぶや、領巾かたしき、眞玉手の、玉手さしかへ、あまたよも、いもねてしがも
とあれば獨宿ならでもいひしなり

寄雨

秋はぎをちらす長雨ナガレのふるころはひとりおきゐてこふる夜ぞおほき
秋芽子乎令落長雨之零比者一起居而戀夜曾大寸
ながづきのしぐれの雨の山霧のいぶせき吾告胸ムネたれをみばやまむ

一云かみなづきしぐれの雨ふり

九月四具禮乃雨之山霧煙寸吾告曾誰乎見者將息

一云十月四具禮乃雨降

上三句は序なり。一云の方二三のつづき穩なり。タレヲ見バヤマムは君ヲ見ズバ止

マジといはむにひとし。告は衍字なり。煙寸ケミの寸の傍に吉とかきたりしがまぎれて
吾の下に入り更に告とあやまられたるならむ。元曆校本には吉とあり

寄蟋

こほろぎのまちよろこべる秋の夜をぬるしるしなし枕マクラ與ト吾者スレバ
蟋蟀之待歡秋夜乎寐驗無枕與吾者

蟋の下に蟀の字のおちたるかと前註にいへり。但下なる草フカミといへる歌にも
蟋とのみ書けり。○マチヨロコベルは待附ケテイサミ鳴クとなり。○結句を從來マ
クラトワレハとよみ、そを釋してたとへば略解に

吾は妹が手枕まかずして枕とのみぬればぬるかひもなきと也
といへれど枕トノミヌレバといふことを枕ト吾ハといひて通せむや思ふべし。案
ずるにもと枕與寐者などありしが卷四(七四四頁)なる枕與吾者イザフタリネムに
引かれて今の如くなれるならむ。さればマクラトヌレバとよみて妹(又は夫子)ト寐
ズシテ枕トノミ寐レバの意とすべし。ヌルシルシナシは寐ル詮ナシとなり

寄蝦

(朝霞)鹿火屋が下になくかはづ聲だにきかばわれこひめやも
朝霞鹿火屋之下爾鳴蝦聲谷聞者吾將戀八方

上三句は序、其中にて又初句は枕辭なり、四五の意はほぼ上二一六一頁にコエダニ
キカバ何カナゲカムとあるに同じ○卷十六にも

朝霞香火屋が下乃なくかはづしぬびつつありとつげむ兒もがも

といふ歌あり。こは今の歌を學べるなりとおぼゆ。鹿火屋については山田などにて
鹿を追ふ爲に火を焚くなりといふ説と蚊遣火を焚くなりといふ説とあり。まづ鹿
火屋が下ニとある下は床下の事とおもはるゝをたとひ鹿を追ふ爲に特に屋を構
へて火を焚くことありとも床を張りて其上にては焚くべからず。又蚊遣火を焚く
爲には特に屋を構へむことあるべからねば蚊火屋とはいふべからず。次にカハヅ
は今のカジカにて清流にのみ棲むものなれば火を焚きて鹿を追ふ處又は蚊を遣
らふ處にては鳴くべからず。別に鹿火屋は飼屋にて江河の岸に小屋を設けて魚を
飼附くるなりといふ説あり。さる事果してありやおぼつかなし。又さる設をするに

便よき處はおそらくはカハヅの好みて棲む處にはあらず。又たとひさる設をして
其小屋に名をつくとも飼屋とは名づくべからず。されば此説も信じがたし。案ずる
にカハヅは前述の如く清流にのみ棲むもの、而して鹿火屋が下ニナクカハヅとあ
れば鹿火屋は河上に造り設けたるものならざるべからず。されば鹿火屋又は香火
屋とあるは鹿半屋香半屋などの誤にて河屋にあらざるか。

廁もいにしへ河上に造り設けしかばカハヤと名づけしなりといふ説あり

山家にては今も家屋の一部を河上に造り設くる事あり。否東京の郊外にも河上に
造りかけたる家屋あり

寄鴈

いでていなばあまとぶ鴈のなきぬべみけふけふといふに年ぞへにけ
る

出去者大飛鴈之可泣美且今日且今日云二年曾經去家類

うき事ありて立去らむと思ふに立去らば妻の啼きなむがいとほしさにたゆたひ

たる趣にて契沖のいへる如く古事記なる八千矛神の御歌に似たる所あり。第二句は天トブ雁ノヤウニといふ意、第四句のイフニは思フニといふ意なり。○大は天の誤なり

寄鹿

さをしかの朝ふす小野の草若みかくろひかねて人にしらゆな
左小牡鹿之朝伏小野之草若美隱不得而於人所知名

上三句は序なり。こは女の男にいひかけたるにて往來ニ心シテ人ニ見附ケラルナといへるなり。略解に「忍びかねてあらはれんさまになせそといふ也」といひ古義に「そこと吾との中を世人に知られじとしのぶとすれどしのびえずしてつひに人に知られたまふなと禁めたるなるべし」といへれどもしる意ならばカクサヒカネテとこそいふべけれ。○草ワカミとあれば此歌は春相聞に屬すべきなり
さをしかの小野の草伏いちじろくわが問はなくに人の知れらく
左小牡鹿之小野草伏灼然吾不問爾人乃知良久

上の歌の答にて初二は序なり。三四はアラハニワガ訪來ヌニとなり。古義にトハナクニをコトドハナクニの意としてシノビテカリニモ人ニハイハヌ事ナルヲと釋せるは誤れり。シレラクは知レルコトヨとなり

寄鶴

このよらのあかときくだちなくたづのおもひはすぎずこひこそまさ
れ

今夜乃曉降鳴鶴之念不過戀許增益也

上三句は序なり。アカトキクダチは曉が降つにあらず。曉トクダチとなり。第三句に辭を加へて妻ヲ戀ヒテ思止マズナク鶴ノヤウニと釋くべし。オモヒスギズはオモヒ止マズなり(卷九〇頁)。○参照。○古義の釋は誤れり

寄草

道のへのをばなが下のおもひ草今更爾△なにかおもはむ
道邊之乎花我下之思草今更爾何物可將念

上三句は序なり。下はシタともモトともよみつべし。○第四句イマサラニとよまむに二言足らねば略解古義に今更々爾の脱字としてイマサラサラニとよめり。卷四(六三二頁)に

今更に何をか念はむうちなびきこころは君によりにしものを
卷十二に

今更になにしか念はむ梓弓ひきみゆるべみよりにしものを
などあれど今サラサラニといへる例を知らず。宜しく爾の下に當の字などを補ひてイマサラニハタとよむべし。○思草は學名「エギネチア、インヂカ」俗にキセルサウ又はナンバンギセルといふものなり。圖はいづれの植物圖譜にも見えて今はめづらしからず

寄花

草ふかみこほろぎ^{サハニ}多^{コヨメ}なくやどのはぎ見にきみはいつか來まさむ
草深三蟪多鳴屋前芽子見公者何時來益牟
多を古義にスダギとよみたれどコヨダとよむか又は略解の如くサハニとよむべ

し

秋づけば水草の花のあえぬがにおもへど不知ただにあはざれば
秋就者水草花乃阿要奴蟹思跡不知直爾不相在者

秋ヅケバは卷八(一五九四頁)に

秋づけば尾花が上におく露のけぬべくも吾はおもほゆるかも
又上(二一二三頁)に

庭草に村雨ふりてこほろぎのなくこゑきけば秋づきにけり
とあり。秋サレバといふに近かるべし。水草は上(一九六三頁)にも
春されば水草の上におく霜のけつつも吾はこひわたるかも

とあり。略解に「水は借字にて眞なり」といへる如くにて薄の事なり。上二句は序なり
○アエヌガニはコボルル程となり(卷八 八頁 一五四 参照)○不知は舊訓に従ひてシラジ
とよむべし。略解にはシラジとよめり。我ハ思ヘド君ハ知ラジとなり

何すとか君をいとほむ秋はぎのそのはつ花のうれしきものを

何爲等加君乎將厭秋芽子乃其始花之歡寸物乎

萩ノ始花ノ如クとなり。ソノは言の足らざるによりて補へるなり。例は卷七(二二三六頁)なるミモロノソノ山ナミニ、卷九(二八〇六頁)なるウナガミノ、其津ヲサシテなど

こいまろびこひはしぬともいちじろく色には出でし朝容貌之花

展轉戀者死友灼然色庭不出朝容貌之花

コイマロビはフシマロビなり。略解に「コイマロビはコヤシマロビにて云々」といへるは非なり。コヤシは他人の上にいふ語なり。さて略解に

朝ガホノ花は色ニイツといはんとへにおけるにて云々

といひ古義に

朝貌ノ花のたが目にもそれといちじるき如く色に出てはこひじとなり

といへれどさる意ならばアサガホノ花といひ棄つべからず。無論マダフミモミズ天ノハシダテの如き倒置の枕辭とは見るべからず。倒置の枕辭の事は此卷の末に附載すべし。按ずるに花を如の誤としてアサガホノゴトとよむべきなり

言にいでていはばゆゆしみ(朝貌の)穂にはさきでぬ戀爲鴨
言出而云忌染朝貌乃穗庭開不出戀爲鴨

初二は口外セバ憚アルベキニヨリテとなり。アサガホノは穂ニサキイツにかゝりてイデヌまではかゝらず。卷九(一七九四頁)なる

いそのかみふるのわさ田の穂にはいでず心のうちにこふるこのごろ

と同格なり。さてホニハサキデヌはアラハレテハサカヌとなり。○結句を略解には

コヒモスルカモとよめり。語例は上(一九五四頁)にも

かほ鳥のまなくしばなく春の野の草根のしげき戀毛爲鴨

などあれどこゝはモをよみそへがたければ舊訓の如くコヒヲスルカモとよむべし

かりがねのはつこゑききてさきでたるやどの秋はぎ見に來わがせこ
鴈鳴之始音聞而開出有屋前之秋芽子見來吾世古

上には雁の聲きこゆれば萩は散るやうによめり

(さをしかの)入野のすすき初尾花何時加妹之將手枕
左小牡鹿之入野乃爲酢寸初尾花何時加妹之將手枕

初句はサヲ鹿ノ入ル入野とかゝれる枕辭なり。上三句は序なり○四五を舊訓にイツシカイモガタマクラニセム、略解にイツシカイモガタマクラヲセムとよみ古義には結句を衣手將枕の誤としてイツシカイモガソデマクラカムとよめり。さて序との關係については略解に

上は序にていつか新手枕をせんといふ意也。初といふ詞にのみかゝりてよめりといひ古義にも「本句は序にて初と云にちなみて云々」といへり。さるあやなき事あらむや。妹之將手枕は元曆校本にも類聚古集にも妹之手將枕とあり。されば通本には手と將と顛倒せるなり。訓は契沖のイヅレノトキカイモガテマカムとよめるに従ふべし。さて序のかゝりは入野ノススキニ初尾花ガイヅとかゝれるなり

こふる日のけながくしあればみそのふの辛藍の花の色にいでにけり
戀日之氣長有者三苑圃能辛藍花之色出爾來

第二句は久シケレバとなり。三四は序なり○カラキは紅花なり(四七三頁及一四二

九頁参照)

吾郷爾今咲花乃をみなべしたへぬこころになほこひにけり
吾郷爾今咲花乃をみなべしたへぬこころになほこひにけり
吾郷爾今咲花乃女郎花不堪情尙戀二家里

初二は從來ワガサトニイマサクハナノとよめり。さて宣長は

今サクは新に咲たるをいふ。ハネカヅラ今スルイモといふも同じ

といへれどもとのまゝにては心得られず。郷を屋前などの誤とし今咲を令咲の誤としてワガヤドニサカセムハナノとよむべきか。さて一首の意は我宿ノ物トスベク定マレル女郎花ナレド堪ヘヌ心ニハナホ戀ヒラルと釋すべきか

はぎが花さけるを見れば君にあはずまことも久になりけるかも
芽子花咲有乎見者君不相眞毛久二成來鴨
朝露にさきすさびたる鴨頭草の日たくるなべに可消おもほゆ
朝露爾咲醉左乾垂鴨頭草之日斜共可消所念

略解に「スサビは進也」といひ、古義に「咲荒而有にて咲ミダレタルと云意なり」といひ、清水濱臣の月齋雜稿(國書刊行會本百家隨筆第二の三五三頁)には

このスサビタルは朝露に催されて咲わたるをいふにておのれが心より咲みだれたるをいふにあらず。されば心を入たるにあらぬなればスサビといへりといへり。案ずるにスサビタルは興ニ乗ジタルとなり。干蔭が進なりといへる、まづよろし〇つき草のしほむをケヌといへる異様なるいひざまなれば可消の消は誤字かとおもふに下にも

あしたさきゆふべは消流鴨頭草の可消戀も吾はするかも

とあればなほ誤字にあらず。抑鴨頭草は萬葉集以前にはツキクサとのみいひ、ツクサともいふは平安朝以來の事なりとは一般に信せらるゝ所なれども右の歌どもに其花のしほむことを消といへるを思へばはやく寧樂朝時代にもツユクサともいひしにて、今は契沖のいへる如くその名の縁にてしほむ事を消といへるならむ

長き夜を君にこひつついけらばさきてちりにし花ならましを

長夜乎於君戀乍不生者開而落西花有益乎

イケラズバは生キテアラムヨリハとなり。サキテは軽く添へるなり。卷二二六九頁)なる

吾妹兒にこひつつあらずば秋はぎのさきてちりぬる花ならましを

と相似たり

(わぎもこに)あふ坂山のはだすすき穂にはさきでずこひわたるかも

吾妹兒爾相坂山之皮爲酢寸穗庭開不出戀渡鴨

上三句は序、其中にて初句は枕辭なり。上二一八一頁)に

言にいでていはばゆゆしみ朝がほの穂にはさきでぬ戀をするかも

とあり〇古今集墨滅^{スミケレ}歌に

わぎもこにあふ坂山のしのすすき穂にはいでもこひわたるかな

とあるは此歌のかはれるなり

いささめに今も見がほし(秋はぎの)しなひ二^ニあらむ妹がすがたを

率爾今毛欲見秋芽之四搓二將有妹之光儀乎

イササメニは不圖フトなり(卷七一四二) 參照。二は宜長の説に豆の誤なりといへり。さてシナヒテアラムはタヲヤギタラムとなり。搓はヨルとよむべき字なれば(卷四にタマノヲアワヲニ搓コウ而ムスベレバ、此卷の上にカタ搓コウニイトヲゾワガ搓コウと書けり)ナヒにも充つべし。陸放翁の詩に柳細クシ搓難似といへる。この搓などもヨレドモともナヘドモとも訓すべし

秋はぎの花野のすすき穂にはいはずわがこひわたるこもりづまはも
秋芽子之花野乃爲酢寸穂庭不出吾戀度隱孀波母

初二は序なり。穂ニハ出デズシテ我戀渡ル妻ハ如何ニクラスラムとゆかしみたる趣なり。ハモの事は卷三三九〇頁、五五六頁などにくはしくはしいへり。コモリヅマはカクシ妻なり

わがやどにさきし秋はぎちりすぎて實になる及丹君にあはぬかも
吾屋戸爾開秋芽子散過而實成及丹於君不相鴨

及丹をマデニとよみたれど及母の誤ならむ

わがやどのはぎさきにけりちらぬ間にはや来て可見ミならの里人
吾屋前之芽子開二家里不落間爾早來可見平城里人

可見を略解古義にミマセとよみたれど舊訓の如くミベシとよむべし

いはばしのままにおひたるかほ花の花にしありけりありつつみれば
石走間間生有貌花乃花西有來在筒見者

上三句は序にて四五の意は古義にいへる如くヨク見テ居ルトアダナル性分ナリケリとなり。女の歌なり。ハナニの意は近くは此卷二一〇三頁にいへり。略解の釋は誤れり。〇イハバシは河中の飛石、ママは間々、カホバナは晝顔なり(卷八一六四 參照)

藤原のふりにしさとの秋はぎはさきてちりにき君まぢかねて
藤原古郷之秋芽子者開而落去寸君待不得而

元明天皇の御時都を藤原より奈良に遷し給ひしかばフヂハラノフリニシサトといへるなり。大原ノフリニシサト(一五三頁)香具山ノフリニシサト(四三七頁)などい

へる例あり

秋はぎをちりすぎぬべみたをりもち見れどもさぶし君西あらねば
秋芽子乎落過沼蛇手折持雖見不怜君西不有者

西は四の誤ならむ

あしたさきゆふべは消流鴨頭草のけぬべき戀もわれはするかも
朝開夕者消流鴨頭草可消戀毛吾者爲鴨

上三句は序なり。消流はキユルとよむべし。鴨頭草はツユクサとよむべき事上(二一
八四頁)にいへり

あきつ野の尾花かりそへあきはぎの花をふかさね君がかりほに
蛭野之尾花菊副秋芽子之花乎葺核君之借廬

第二句はヲバナニカリソへのニを略したりと見るべきか○古義に「云々シテ旅ノ
心ヲナグサメタマヘヨとなり」といへる如し。又略解に

此歌は旅のさまにて寄たる意なし。紛れてこゝに入たるもの也

といへる如し。卷一(二七頁)にも

あきの野の美草かりふきやどれりしうぢのみやこのかりほしおもほゆ
とあり

さきぬとも知らずしあらばもだもあらむこの秋はぎをみせつつもと
な

咲友不知師有者默然將有此秋芽子乎令視管本名

モダモアラムヲとヲを添へて心得べし。モダモアラムヲはジツトシテ居ラレヨウ

ニとなり。略解に「これは相見て中々に物思ひのます心をそへたり」といへる如し。古

義の釋は誤れり

寄山

秋されば鴈とびこゆるたつ田山たちてもゐても君をしぞもふ
秋去者鴈飛越龍田山立而毛居而毛君乎思曾念

上三句は序なり

寄黃葉

わがやどの田葛葉日にけに色づきぬ不△座君は何どころぞも
我屋戸之田葛葉日殊色付奴不座君者何情曾毛

元曆校本に葉の字なければどなほ葉を存じてクズバとよむべし。第四句は今マデ來マサヌ君ハと辭を補ひて心得べし。○不の下に來の字のおちたるなり

(足引の)山さなかづらもみづまで妹にあはずやわがこひをらむ
足引乃山佐奈葛黃變及妹爾不相哉吾戀將居

サナカツラは即五味なり。四五は妹ニ逢ハデ我戀ヒ居ラムカとなり

(もみぢ葉の)すぎがてぬ兒を人妻と見つつやあらむこひしきものを
黃葉之過不勝兒乎人妻跡見乍哉將有戀敷物乎

略解に「スギガテヌは思ひ過し難き也」といひ古義に「過しがてにする意にてわが思を得やりすぐさず心の切なるをいへり」といへるは非なり。ワガ棄テテハ得行過ギヌ女ヲ人妻トヨソニ見ツツアラムカといへるなり

寄月

君にこひしなえうらぶれわがをれば秋風ふきて月かたぶきぬ
於君戀之奈要浦觸吾居者秋風吹而月斜烏

シナエウラブレは弱リ衰へなり。烏は焉の俗字なり

秋の夜の月かも君は(雲がくり)しましも見ねばここだこひしき
秋夜之月疑意君者雲隱須臾不見者幾許戀敷

第三句は月の縁語をシマシ見ヌの枕辭につかへるなり。○疑意はカモに充てたるなり。下にも例あり

なが月のありあけの月夜ありつつも君が來まさばわれこひめやも
九月之在明能月夜有乍毛君之來座者吾將戀八方

初二は序、アリツツモは引續イテなり

寄夜

よしゑやしこひじと爲跡あき風のさむくふく夜は君をしぞもふ

忍[△]咲八師不戀登爲跡金風之寒吹夜者君乎之曾念

ヨシエヤシコヒジといふ文を承けたれば爲跡は念跡の誤なる事しるし○忍は誤字か

惑者之あな情無跡おもふらむ秋の長夜を寐師耳[△]

惑者之痛情無跡將念秋之長夜乎寐師耳

惑者は元曆校本には或者とあり。舊訓にワビビトノとよめり。契沖千蔭は此訓に従ひて卷九なる過葦屋處女墓時作歌の惑人ハネニモナキツツを例に引きたれどその惑人は或人の誤としてアルヒトとよむべき事彼歌の處(一八四五頁)にいへる如し。宣長は卷十八にマドハセルを左度波世流といへるを證としてこの惑者をもサトビトとよみ、雅澄は此説に従ひて惑者之をサトビトシとよめり。案するに有心者之の誤としてミヤビヲガとよむべきか○情無跡は舊訓に従ひてココロナトとよむべし(古義にはココロナシトとよめり。語尾のシを略せる例は集中にもアナミニク、アナタフトなどあり○オモフラムは上なるサキヌトモシラズシアラバモダモアラムに准じてオモフラムヲとヲを添へて心得べし○寐師耳を契沖は一本に

寐臥可とあるに據りてイネフスベシヤとよみ千蔭は不寐師在の誤としてイネズシアレバとよみ雅澄は寒師有の誤としてサムクシアレバとよめり。案するに契沖の引ける別校本及類聚古集に寐臥可とあるに基づきて臥を明の誤としてネテアカスベシヤとよむべし。されば一首は

みやびをがあなこころなとおもふらむ秋の長夜をねてあかすべしや

となりて古今集秋上なる躬恒の

かくばかりをしとおもふ夜をいたづらにねてあかすらむ人さへぞうき

といへるに似たる歌となるなり

秋の夜を長しといへどつもりにし戀をつくせばみじかかりけり

秋夜乎長跡雖言積西戀盡者短有家里

戀ヲツクスは上に年ノ戀コヨヒツクシテ(二〇五二頁)また年ノヲ長クオモヒコシ

戀ヲツクサム(二〇七七頁)とあり

寄衣

秋つ葉アキツハにほへる衣吾ウロハはきじ於君キミ奉者ウラナ夜毛ヨモ著カ金ガネ

秋都葉爾爾寶徹流衣吾者不服於君奉者夜毛著金

略解に

卷三秋津羽ノ袖フル妹ともよみて蜻蛉の羽也其蜻蛉の羽のうるはしきをニホフといへり

といへるは非なり契沖のいへる如く秋相聞の部に入れたればこゝに秋ツ葉といへるは紅葉なり而してニホヘルは染レルにてやがて紅葉をすれる衣なり契沖雅澄が紅色の衣とせるは非なり○四五を舊訓略解にキミニマダサバヨルモキルガネとよみ古義にキミニマツラバヨルモキムガネとよめり集中に伊比都具ガネト登母之夫流ガネ安倍母奴久ガネ可多里都具ガネなどありてイヒツガムガネトモシビムガネアヘヌカムガネなどいへる例なければこゝもキルガネとよむべし又第四句は者を名などの誤としてキミニマツラナとよむべし一首の意は紅葉ヲ摺レルコノ美シキ衣ヲ我著ムハ惜シケレバ我ハ著ズシテ君ニ奉ラムセメテ夜ナリトモ著タマフベク

といへるなり。ヨルモは夜ダニの意なり。夜モ亦の意にあらず。諸註このモを解頌へり

問答

旅にすら襟ヒモとくものを事しげみまろねわがする長きこの夜を

旅尙襟解物乎事繁三丸宿吾爲長此夜

代匠記に

襟はコロモノクビにて衿の字と同じ。字書を見るにヒモとよむべき義なし。不審なり。若字を書たがへたるにや

といひ略解に

ヒモトクは専ら帯を解事をいへるを襟の字を用ひたるは襟ヒモにも紐あればなりといひ古義に

襟字ヒモと訓外なし。紐の義あることをしらす。襟にも紐あれば用たるか

といへるは非なり。襟はクビともヒモともよむべき字なり。訓義辨證下卷(四〇頁)に按に襟は衿の俗字なり。説文に衿、衣系也と見え廣韻に衿、衿帶、或作襟とある是也。

かくて此紵字を或はまた袷ともかけり、これ襟袷は紵の俗字にてヒモと訓べきことは其字注にて明らかなり。但し紵字偏旁を變じて袷に作り後また諧聲して襟とはかけるなり

といへり。クビの衿襟とヒモの衿襟と字の成りし由來は異なれど衿襟共にクビ(エリ)ともヒモ(オビ)とも訓むべし(卷九一八五 参照)○歌の意は

旅ニテスラ帶ヲ解キテ女ト寢ル事ハアルヲ家ニアリナガラ此頃ハ障多クシテ妹ノ許ニ得行カズシテコノ長キ夜ヲ丸寐スル事ヨ

といへるにて古義にいへる如し。略解に「コトシゲミは事は言にてこちたくいひさわがるゝをいふ」といへるは非なり

しぐれふるあかときづくよ紐とかずこふらむ君とをらましものを
四具禮零曉月夜紐不解戀君跡居益物

初二はコノヲリヲリシダグルル曉月夜ニと譯すべく三四は丸寐ヲシテ我ヲ戀フラムソノ君ト共ニと譯すべし○以上問答なり

もみぢ葉におくしら露の色葉二毛いでじと念者ことのしげけく

於黄葉置白露之色葉二毛不出跡念者事之繁家口

初二はイロニイツにかゝれる序なり。第三句を略解にはニホヒニモとよみ宣長は葉二を顛倒としてイロニハモとよめり。後者に從ひてモを助辭とすべし○念者を雅澄は念煮の誤とせり。コトノシゲケクは人ノ口ノウルサキ事ヨとなり

雨ふればたぎつ山川石にふり君之摧こころは不持

雨零者瀧都山川於石觸君之摧情者不持

右一首不類秋詞而以和載之也

上三句は序なり。なほ後にいふべし○不持は舊訓の如くモタジとよむべし。略解にモタズと改めたるはわろし○第四句は從來字のまゝにキミガクダカムとよみて君ガ心ヲ摧カムの意とせり。案ずるに結句のココロは作者の心なれば第四句を君ガ心ヲ碎キ給フラムの意とせむに心といふ語足らざるにあらずや。辭を換へて云はむに君ガ心ヲ碎キ給ヒナムといふことをただに君ガクダカムといふべきならむや。又イハニフリはクダカムにかゝるべくクダカムにはかゝるべからず。轉じて

語例を求むるに卷三五三六頁に

妹も吾もきよみの河のかはぎしの妹がくゆべき心はもたじ

又卷十一にワガセコガオモヒクユベキ心ハモタジ又卷十四にイハグエノキミガクユベキココロハモタジとあれば今も君之可悔とありしを誤れるなり。さて上三句はキミガを隔ててクユにかゝれるなり○略解に

右二首は問答にあらず。此二首の間に別に答と贈と有けむを脱せしなるべしといへり。げに前の歌の答とはおぼえず

譬喩歌

はふりらがいはふ社のもみぢ葉もしめ繩こえてちるといふものを

祝部等之齋經社之黄葉毛標繩越而落云物乎

略解に「親の守る少女などにしひてあはんの心にとへたり」といへる如し。さてこのシメ繩は忌垣に相當するものにて神社の境界線なり。略解古義にユフカケテイムコノモリモコエヌベクまたチハヤブル神ノイガキモコエヌベシを例に引けるを見れば千蔭雅澄はこの歌の趣を誤解せるなり。契沖のいへる如く彼歌どもの

コエヌベク、コエヌベシは外より内へ越ゆるにて今の歌のコエテは内より外へ越ゆるなれば例に引くべきにあらず

旋頭歌

こほろぎのわがとこのへになきつつもとなおきゐつつ君にこふるにいねがてなくに

蟋蟀之吾床隔爾鳴乍本名起居管君爾戀爾宿不勝爾

コフルニはコフトテなり。略解に「イネガテナクはイネガテといふに同じ詞也」といへるはいみじき誤なり。イネガテナクニは寐敢ヘヌニなれば兩語の相異なるはチルとチラズとの相異なる如し

(はだすすき)穂にはさきでぬ戀をわがする(玉蜻)ただ一目のみ視し人ゆゑに

皮爲酢寸穗庭開不出戀乎吾爲玉蜻直一目耳視之人故爾

穂ニハサキデヌは外ニハ顯レヌとなり。はやく上二一八一頁に見えたり。ワガスル

は我爲ル事ヨとなり。人ユエは人ナルニなり

冬雜歌

○

我袖にあられたばしるまきかくし不消有妹が見むため
我袖爾電手走卷隱不消有妹爲見

第四句は契沖に従ひてケタズテアラムとよむべし。略解にケタズモとよめるはわろし。マキカクシは卷包ミの意なり

(足曳の)山鴨高まきむくのきしの子松にみゆき落來

足曳之山鴨高卷向之木志乃子松二三雪落來

マキムクノキシは卷向川の岸ならむ○從來第二句を山カモタカキ結句をミユキフリケリとよめり。高を寒の誤として第二句を山カモサムキとよむべく結句はミユキフリクルとよむべし。山といへるは無論卷向山なり

卷向の檜原もいまだ雲るねば子松がうれゆ沫雪ながる

卷向之檜原毛未雲居者子松之末由沫雪流

雲キネバは雲キヌニにて雲ガカカラヌニとなり

(足引の)山ぢもしらずしらがしの枝もとををに雪のふれれば

或云枝もたわたわ

足引山道不知白杜枝枝母等乎乎爾雪落者

或云枝毛多和多和

右柿本朝臣人麿之歌集出也。但一首、或本云三方沙彌作

シラズはシラレズなり(卷九三頁五 参照)○杜枝は宣長の説に戕荆の誤なりと云へり。戕荆は和名抄に加^カ之とありて舟を繋ぐ^ツ枝なり

左註の但の下に元曆校本に件の字あり。多和多和は多和和爾の誤か

詠雪

奈良山の峯尙霧合うべしこそまがき之下の雪はけずけれ

奈良山乃峯尙霧合宇倍志社前垣之下乃雪者不消家禮

下を舊訓古義にはシタとよみ略解にはモトとよめり。モトとよむべし。ケズケレは消エザリケレとなり。○第二句を舊訓略解にはミネナホキラフとよみ古義にはミネスラキラフとよめり。前者に従ふべし。ナホはヤハリなり。キラフはクモルなり。否こゝにてはクモレリなり

ことふらば袖さへぬれてとほるべくふりなむ雪の空にけにつつ

殊落者袖副沾而可通將落雪之空爾消二管

コトフラバはカク降ル程ナラバなり。コトは如なり。略解に「コトニフラバ也」といへるは非なり。○四五はフリナムツノ雪ノアタラ空ニキエツツとなり

夜をさむみ朝戸をひらき出見れば庭もはだらにみゆきふりたり

一云庭もほどろに雪ぞふりたる

夜乎寒三朝戸乎開出見者庭毛薄太良爾三雪落有 一云庭裳保杼呂爾

雪曾零而有

第三句を略解にイデテミレバとよめり。舊訓に従ひてイデミレバとよむべし。ハダラは斑にてホドロはハダラの轉せるなり

ゆふさればころもで寒之高松の山の木毎に雪ぞふりたる

暮去者衣袖寒之高松之山木毎雪曾零有

宣長は之を久の誤としてサムクとよめり。三の誤としてサムミとよむべし。そのサムミはサムキニの意なり。或は寒之はもとのまゝにて零有が零良之の誤ならむかとも思へど、さらば木毎とまではいふべからず。木ゴトニといへるは目に見ていへる調なればなり

わが袖にふりつる雪毛ながれゆきて妹がたもとにいゆきふれぬか

吾袖爾零鶴雪毛流去而妹之手本伊行觸糠

雪毛は雪之の誤とすべし。古義に「毛は第四句の下にめぐらして妹ガタモトニモと心得べし」といへるは妄とも妄なり。○イユキフレヌカは行行觸レヨカシとなり。語例は上(一一三七頁)に

わがせこがしろたへごろも行觸ればにほひぬべくももみづ山かも
とあり袖に雪のちりかゝるに興じたる趣なり

沫雪はけふはなふりそしろたへの袖纏將干人毛不有惡
沫雪者今日者莫零白妙之袖纏將干人毛不有惡

四五は舊訓にソデマキホサム人モアラナクニとよめり。さて略解に「我袖を纏寝、あ
るはほさんよしのなきと也」といへるを斥けて古義には纏を衍字としてコロモデ
ホサムとよめり。卷九(二七一九頁)にも衣手ヌレヌホス兒ハナシニとあれば古義の
説に従ふべし。○結句の惡の字について契沖は

惡は集中に此歌ならでは借て用たる所なきに不有惡をアラナクニとはよみが
たし。君は例多ければ書たがへたる歟
といひ略解には

結句はアラナクとも訓べけれど惡はヲのかなに用ひしならん
といひてヒトモアラヌヲとよめり。類聚古集にはまさしく人毛不有君とあり(元曆
校本の傍書にも)

はなはだもふらぬ雪ゆる言多毛天三空者隱相管
甚多毛不零雪故言多毛天三空者隱相管

雪ユエは雪ナルニとなり。言多毛は舊訓にコチタクモとよめるを略解に許多毛の
誤としてココダクモに改めたり。之に従ふべし。○天三空は舊訓にアマノミソラと
よめるを略解にアマツミソラと改めたるを古義に卷五好去好來歌に阿麻能見虛
とかけるを證としてアマノミソラとよむべしといへり。○結句は舊訓にクモリア
ヒツツとよめるを古義にクモラヒニツツとよめり。○雪の降の乏しきをあかず思
へる趣なり。○隱は陰の誤なり

わがせこを今か今かといでみれば沫雪ふれり庭もほどろに
吾背子乎且今且今出見者沫雪零有庭毛保杼呂爾

ワガ夫子ヲ今來ムカ今來ムカト思ヒテ庭ニ出見レバとなり

(足引の)山爾白者わがやどにきのふのゆふべふりし雪かも
足引山爾白者我屋戸爾昨日暮零之雪疑意

第二句を從來ヤマニシロキハとよみたれどヤマノシロキハとよみ改むべし。爾は乃の誤にてもあるべく又このまゝにてもノとよむべし(二〇七五頁参照)

詠花

たが苑の梅の花ぞも久堅のきよき月夜にここだちりくる
誰苑之梅花毛久堅之清月夜爾幾許散來

花の下に曾をおとしたるか

梅の花まづさく枝をたをりてはつとなづけてよそへてむかも

梅花先開枝手折而者裏常名付而與副手六香聞

タヲリテハのハは助辭なり。梅花ノ早咲ノ枝ヲ折リテ裏ト稱シテ人ニ贈リテワガ其人ヲ思フ心ヲ托セムカといへるなり(卷八四頁 參照)。略解に妹ガ方ニテ我ツトト名付テ我ニヨソヘテダニ思ヒコシテンカと譯し、古義に

梅花のまづ魁に開たる初花を折て彼が許に贈りて見せたくはあれども、もし折て贈りたらば人が見て彼方へ裏物をさへ贈りたりと名付て彼人と吾との中に

ゆるある如くよそへていひたてさわがむか、嗚呼見せたき梅の初花ぞとなりといへり。此等の説の如くならばヨソヘナムカモといはざるべからず

たが苑の梅にか有家武ここだくも開有可毛見我欲左右手二

誰苑之梅爾可有家武幾許毛開有可毛見我欲左右手二

有家武は宣長のいへる如く有良武の誤なり。開有可毛は略解に従ひてサキニタルカモとよむべし(古義にはサキニケルカモとよめり)○結句を略解古義にミガホルマデニとよみたれどミガホルといふ語は無し。宜しくミガホシキマデニと八言によむべし○略解に「右の答なるべし」といへるは非なり

來て視べき人もあらなくに吾家なる梅のはつ花ちりぬともよし

來可視人毛不有爾吾家有梅早花落十方吉

雪さむみ咲者不開うめの花よしこのごろはさてもあるがね

雪寒三咲者不開梅花縱比來者然而毛有金

第二句を契沖はサキハヒラケズとよみ雅澄はサキニハサカズとよめり。後者に從

ふべし。ヲヲリニヲヲリなどと同例なり。但古今集戀五なるアキ風ノフキトフキヌ
ルムサシ野ハの例に據りてサキトハサカズともよむべし。意はズンズン咲カズと
なり。○アルガネはアルベクなり。四五の意は此頃ハサヤウニグヅグヅシテキル方
ガ却リテヨイとなり

詠露

妹がためほつえの梅をたをるとはしづえの露にぬれにけるかも
爲妹末枝梅乎手折登波下枝之露爾沾家類可聞

タヲルトハはタヲルトテハなり。タヲルトテとあるべきが如くなれどトテといふ
辭は當時いまだ行はれざりき

詠黄葉

八田^{ヤタ}の野の淺茅いろづくあらち山峯の沫雪さむくふるらし

八田乃野之淺茅色付有乳山峯之沫雪寒零良之

八田^{ヤタ}野は大和國添下郡^{ソノシモ}今の生駒郡の内^{ウチ}に、有乳山は越前にあり。代匠記に

寧樂、京の時官事などに付て秋の末に越前へ赴きける人を或は留れる妻、或は親
族朋友等の八田野の淺茅の色付行を見て彼越路は聞ゆる寒國なれば今は荒乳
山に雪の寒く降らむを凌てや越らむとおもひやりてよめる歌なるべし
といへる如し。上(二一三六頁)なる

わが門の淺茅いろづくよなばりの浪柴の野の黄葉ちるらし
と同格類想なり

詠月

さよふけばいでこむ月を高山の峯^{ミタケ}白雲^{ユキクモ}將^{カモ}隱鴨^{カモ}

左夜深者出來牟月乎高山之峯白雲將隱鴨

四五を略解古義にミネノシラクモカクスラムカモとよみ、さて略解に
夜更ケバ出ベキ月ノ出ヌハ高キ山ノ雲ノ隱スカといふ也。此歌冬の歌ともなし。
紛れて入れるか

といひ古義にも『冬の歌としもなきを混れてこゝに収しにや』といへり。案ずるにサ
ヨフケバイデコム月ヲと未來にいひたればいまだ夜も更けず月も出でざるなり。

而して月のいまだ出でざるにはミネノシラ雲カクスラムカモとはいふべからず。されば雲を雪の誤とし又將の下に水の字を補ひて將水隱鴨としてミガクラムカモとよむべし。月を鏡などに比して峯ノ白雪ガ磨クラムカといへるなり

冬相聞

○

ふる雪のそらにけぬべくこふれども相アヲ依ヨシ無ナク月ツキぞへにける

零雪虚空可消雖戀相依無月經在

フル雪ノソラニは二句未滿の序なり。略解に「フル雪ノ如クといふをはぶけり」といへるは非なり。フル雪ノ空ニ消ユルガ如クといふ意の序なり。ケヌベクは死ヌベクなり。○四五を舊訓にアフヨシヲナミ古義にアフヨシモナクとよめり。アフヨシナクテとよむべし

沫雪は千重にふりしけこひしくのけながき我ワレみつつしぬばむ

沫雪千里零敷戀爲來食永我見偲

右柿本朝臣人麿之歌集出

千重ニフリシケは千重ニ降重ナレとなり。我を舊訓にはワレヤとよめり。略解に従ひてワレハとよむべし。三四は戀シクアル事ノ久シクテ慰ム事ナキ我ハとなり。ミツツシヌバムはソヲ見ツツ愛デムとなり。慰む事のなきによりて雪の久しく消えざらむことを願へるなり。シヌブの事は卷三五六四頁にいへり。○卷二十にはつゆきはちへにふりしけこひしくのおほかるわれはみつつしぬばむとあるは今のといさゝかかはれるのみ

寄露

咲出照梅のしづえにおく露のけぬべく妹にこふるこのごろ

咲出照梅之下枝置露之可消於妹戀頃者

濱臣は照を鳥の誤として下につづけてサキヰヅルウメとよみ。雅澄は上二一八一頁に開出有ヤドノアキハギとあるに據りて照を有の誤として上に附けてサキデ

タルウメとよめり。濱臣の説に従ふべし。上三句は序なり

寄霜

はなはだも夜ふけてなゆき道のへのゆざさが上に霜のふる夜を
甚毛夜深勿行道邊之湯小竹之於爾霜降夜烏

夜フケテナユキは契沖が

夜深ぬさきにゆけとにはあらず。明して行けと留る意なり

といへる如し。ナユキは歸ルナと譯すべし。ユザサは繁き笹なり。フル夜ヲはフル夜
ヅとなり

寄雪

ささの葉にはだれふりおほひけなばかもわすれむと云者ましておも
ほゆ

小竹葉爾薄太禮零覆消名羽鴨將忘云者益所念

初二は序なり。ハダレはハダレ雪なり(卷九二頁一参照)○云者はイヘバとよみて通

せざるにあらねど、なほ云煮の誤としてイフニとよむべし。ケナバカモワスレムト
イフニとは死ナバ忘レムカト女ノ云來レルニとなり。カモのモは助辭なり。マシテ
オモホユは一入ソノ女ガシノバルとなり

霰落板敢かぜふきさむき夜や旗野爾こよひわがひとりねむ

霰落板敢風吹寒夜也旗野爾今夜吾獨寐牟

初句を舊訓にミヅレフリとよめるを(和名抄にも霰を美曾禮とよめり)契沖以下ア
ラレとよみ改めたり。案ずるに寄雪歌の中なればミヅレにてもアラレにてもかな
はず。おそらくは霰は三雪の誤ならむ○板敢を舊訓にイタマとよめるを古義に板
聞の誤としてイタモとよめり。イタモはイタクモなり○ヨヤは夜ヲヤなり○旗野
爾は於野上の誤としてヌノヘニとよむべし○卷二(一一五頁)なる

みよし野の山のあらしのさむけくにはたやこよひもわがひとりねむ
に似たるは偶然のみ

よなばりの野木にふりおほふ白雪のいちじろくしもこひむ吾かも

吉名張乃野木爾零覆白雪乃市白霜將戀吾鴨

野木は野に立てる木なり。上三句は序なり。ワレカモは我カハなり。上二一六九頁にもイチジロクシモワレコヒメヤモとあり

ひとめ見し人にくふらくあまぎらしふりくる雪の^{タチ}可^イ消^イ所^イ念^イ

一眼見之人爾戀良久天霧之零來雪之可消所念

コフラクに二義あり。卷三(四三二頁)なる

みわたせば明石の浦にともす火のほにぞいでぬる妹にくふらく

などはコフル事ハといふ意。卷四(七七〇頁)なる

戀草をちから車になくなるまつみてこふらくわがこころから

などは戀フル事ヨといふ意なり。今はいづれの意としても結句と相かなはず。可消

所念といはむとならば人ニコフトなど云はざるべからざればなり。結句はおそろ

くは消者可消などありしを次なる可消所念また次なるアマギラシフリクル雪ノ

可消所念とまぎれて今の如くなれるならむ。さて第二句は人ニコフル事ヨの意と

すべし。三四は無順序なり

おもひいづる時はすべなみ豊國のゆふ山雪のけぬべくおもほゆ

思出時者爲便無豊國之木綿山雪之可消所念

ユフ山は卷七(一三三九頁)にもヲトメラガハナリノ髪ヲユフノ山とありて豊後國

なる由布嶽の事なり。三四は序なり。○契沖が

此は豊後に官事などにて下れる人の故郷の妻を思出てよめるなるべし

といへる如し

いめのごと君をあひ見てあまぎらしふりくる雪のけぬべくおもほゆ

如夢君乎相見而天霧之落來雪之可消所念

イメノゴトはホノカニなり

わがせこが^{コト}言^ル愛^シ美^シ出^テ去^ル者^ヲ裳^引將^知雪^なふ^りそ^ね

吾背子之言愛美出去者裳引將知雪勿零

言愛美を舊訓と古義とにはコトウツクシミとよみ略解にはコトウルハシミとよ

めり。メデタサニといふ意とおぼゆればウルハシミとよむべし。○三四を契沖始め

てイデユカバモヒキシルケムとよみ、さて

裳引は裳のすそを引なり。雪に跡のつきて人に知らるべきとなり

といひ、略解古義に之を敷衍して

わがせこが思ふてふ言のうるはしければ逢んとて出行んに雪降なば裳を引たる跡のしるくて人に知らるべければ降ことなかれと也。○文は略解に據る

といへり。案ずるに裳引將知は裳下將沾などの誤としてモノスソヌレムとよむべし。又略解古義には出行ンニ今出テ行ムト思ヘドといひ雪降ナバ雪フラバといひていまだ出行かずいまだ雪降らざる趣と見たれど雪は夙く降始め人ははやく出行きぬる趣なり。されば第三句を出行煮の誤としてイデユクニとよみ結句をシカ雪ナフリソの意とすべし

梅の花それともみえずふる雪のいちじろけむな間使やらば

一云ふる雪に間使やらばそれとしらむな

梅花其跡毛不所見零雪之市白兼名間使遣者 一云零雪爾間使遣者其

將知名

上三句は序なり。第二句は第三句に續けて心得べし。○四五の意は古義に

思ふ人の許へ間使遣たらばだが目にもそれとしるくて人に知られむな、さりと

て使を遣ずして止べき事にあらぬをいかがはせむと嘆きたるなり

といへる如し。○間使は卷九(一七〇四頁)にも見えたり

あまぎらひふりくる雪の△消友君にあはむとながらへわたる

天霧相零來雪之消友於君合常流經度

初二は序なり。第三句は將消友の將のおちたるならむ。略解古義にケナメドモとよ

めれどキエメドモとよむべし。意は命ウセメドモとなり。○略解に

世ニナガラへ居ルといふ也。降を流ルともいへば相兼ていへり

といひてナガラへを雪の縁語としたるは非なり。○卷八(二六七〇頁)なる

沫雪のけぬべきものを今までにながらへぬるは妹にあはむとぞ

と相似たり

(うかねらふ)跡見山雪のいちじろくこひば妹が名人しらむかも

窺良布跡見山雪之灼然戀者妹名人將知可聞

初二は序、其中にて又ウカネラフは鳥見にかゝれる枕辭なり。ウカネラフといふ語ははやく卷八(一六〇〇頁)に見えたり。跡見山の雪をトミ山雪といへるは上なる木綿山雪の類なり。第三句以下はアラハニ戀ヒナバ妹ガ名ヲ人ノ知ラムカとなり。窺の下にネに當る字をおとしたるか

(あま小船)はつ瀬の山にふる雪のけながくこひし君が音ぞする
海小船泊瀬乃山爾落雪之消長戀師君之音曾爲流

上三句はケにかゝれる序にてアマヲブネはハツにかゝれる枕辭なり。ケナガクは久シクなり。音ゾスルは音ヅレガアツタとなり。略解に「音は音信也」といへる如し。古義に「君が來るとて馬車などの音するをいへるならむ」といへるは非なり

わざみの嶺△ゆきすぎてふる雪の厭毛無跡まをせその兒に
和射美能嶺往過而零雪乃厭毛無跡白其兒爾

契沖以來ワザミノ、ミネユキスギテとよみて初句を四言とせり。そのワザミノ嶺は

卷二高市皇子尊殯宮之時歌(二六六頁)に見えたるワザミガ原と同處にて美濃國不破郡の山ならむ。○第四句を契沖はウケクモナシトとよみ、千蔭はイトヒモナシトとよみ、宣長は消長戀跡の誤としてケナガクコフトとよみ、雅澄は敷手念跡または厭時無跡の誤とせり。又契沖は「此歌は美濃に妻を置て使を遣はす人の使にむきて云意なり」といひ、宣長雅澄も此説を是認せり。即三家はユキスギテを使のあなたへ越行く意とせるなり。なほ云はば三家は

ふる雪の厭毛無跡わざみの嶺ゆきすぎてまをせ其兒に
の意とせるなり。案するに厭を恙の誤として第四句をツツミモナシトとよむべきか。ツツミは障なり難なり。卷十五に

大船をあるみにいだします君つつむことなくはやかへりませ
又卷二十に

ありめぐり、事しをはらば、つつまはず、かへりきませと
あをうなばらかせなみなびきゆくさくさつつむことなくふねははやけむ
とあるは皆サハル事ナクなり。なほツツミの語意は玉勝間卷十二(宣長全集第四の

二七七頁及大祓詞後釋上卷同第五の四五〇頁にくはしく云へるを見てさとりべし。さてツツミモナシトとよむべくばユキスギテは作者の事にてワザミノ嶺をこなたへ越來るなり。更に思ふに嶺の下、往の上に我の字をおとせるならむ。もし然らば

わざみの嶺、わがゆきすぎてふる雪のつつみもなしとまをせその兒に

といふ歌にて美濃の國府(今の不破郡府中)を立ちて京に上る人の途中にて國府より送り來れる者に向ひて

今ハワザミノ嶺モ越エハテテ降ル雪ノサハリモナシト還リテ彼女ニ白セ

といへるならむ。このソノは卷三(四八七頁及四九八頁)なる

ぬばたまの其夜の梅たをわすれてをらず來にけり思ひしものを

ひと日には千重浪しきにおもへどもなぞ其玉の手にまきがたき

のソノと同例なり

寄花

わがやどにさきたる梅を月夜よみ夕夕みせむ君をこそまて

吾屋戸爾開有梅乎月夜好美夕夕令見君乎祚待也

夕夕は古義に従ひてヨヒヨヒとよむべし(略解にはヨルヨルとよめり)。さてヨヒヨヒはミセムにかゝれるにあらず。マテにかゝれるなり。見セム君ヲコソヨヒヨヒ待テと辭をおきかへて心得べし。○祚は社の誤ならむ。マテを待也と書けるは上(二七七頁)にコヒコソ益也と書けると同例なり。此外にもアサツユノ如也(ユフギリノ如也)(三一〇頁)オトノサヤケサ(一二四二頁)ミルガカナシサ(二五〇一頁)モミデハヤツダ(二五六九頁)など也を添へて書ける例あり

寄夜

(あしひきの)山下風はふかねども君なきよひはかねてさむしも
足檜木乃山下風波雖不吹君無夕者豫寒毛

山下風を略解にヤマノアラシとよめるを古義にアラシノカゼとよみ改めたり。案ずるに集中にアラシを山下ともかき下風ともかけり。即山下とかけるは

山下之風なふきそと(卷九一七六)

ころもでに山下吹而(卷十三)

などにて、下風とかけるは

佐保の内ウラ下風シ之吹フ禮レ波ガ卷十一

あしひきの下風吹夜者コハ同上

などなり。さればこゝの山下風、また卷一(一一五頁)なるミヨシ野ノ山下風ノ、また卷八(一四九七頁)なる山下風ニチリコスナユメなどはヤマノアラシともよむべくアラシノカゼともよむべし

アシヒキノといふ枕辭を戴きたるを證としてヤマノアラシとよまむかといふに卷十一に山を畧してアシヒキノ下風ウラフク夜ハといへる例あり

○結句にカネテとあれば第三句はマダ吹カネドモと辭を補ひて心得べし。カネテは吹カヌサキヨリとなり。さてこは一夜の趣なり。略解に

カネテといへるはいまだ冬にも入りたたぬほどの歌にてあらかじめ寒き意なるべし

といへるは誤なり○君ナキヨヒハとは君ト相寝セヌ夜ハとなり

(大正十年九月講了)

附録

倒置の枕辭

枕辭は上に置くものなれば枕辭といふ名はあるなり。さるを之を下に置く事あり。たとへば百人一首なる小式部内侍の

大江山いく野のみちのとほければまだふみもみずあまのはしだて

といふ歌のアマノハシダテはやがて上なるフミといふ語の枕辭なり。天の橋立は母和泉式部の住める國の名所。橋立即梯子は踏みてものする物なればフミ(消息)の枕辭につかへるなり。百首異見に

天の橋立とさしつけていへるはやがて橋立のあたりは母の在所なればなるべし
などいひ又

さて此歌、詞書をはなれて聞く時は道の程遠ければかの橋立をばまだ行きて踏み渡りたる事なしといふ意に聞ゆ

などいへるは眼を蔽ひて人を捉へむとするに似ていと齒痒くおぼゆれど終に母よりの文を見ずといふが表なれば天の橋立はかへりてフミモミズの序のやう

の意ばへにきゝとるべし

と云へるは活眼よく布を透すものといふべし。されどなほ景樹は當時枕辭を下におく一格の行はれしを知らざるなり。さて此格は無論小式部内侍の創意にあらず。八代集を檢するに此格の始めて見えたるは拾遺集にて

天祿四年五月廿一日圓融院のみかど一品の宮にわたらせ給ひてらん碁とらせ給ひけるにまけわざを七月七日にかの宮より内の臺盤所に奉られける扇にはられて侍りけるうす物におりつけて侍りける 元輔 天のかは扇のかせにきりはれて空すみわたるかささぎの橋

といふ歌なるべし。此歌の結句も一首の意に與からず。即第四句なるワタルといふ語の枕に七夕に縁あるカササギノ橋といふ語を用ひたるなり。之と同じく後拾遺なる題しらず 和泉式部 津の國のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ蘆の八重ぶき

といふ歌のアシノヤへ葺はヒマの枕辭ヒマは歌の表にては人目のひま枕よりかりては屋根のすき間なり)同じ集なる

やよひの月龍門に参りて瀧のもとにてかの國の守義忠朝臣が桃の花の侍りけるをいかが見るといひ侍りければ 辨の乳母 物いはば問ふべきものをもの花いく世かへたる瀧のしらいと

といふ歌の結句はへといふ語の枕辭なり。機の縦糸をそろへ張るをフル(綜)といふ。其語のはたらけるへタルを世ヲ經タルに副へたるなり。但此歌は瀧の白糸が幾世を経たるかを桃の花に問ひてむといへるやうにも聞ゆれど、よく思ふにもし其意ならば瀧の方主となりてはし書に

桃の花の侍りけるをいかが見るといひ侍りければ

とあるにかなはじ。此文の意は

桃ノ花ノサイテ居タニツイテ其桃ノ花ノ歌ヲヨメト云ウタカラ

といふ事なれば歌にても桃花の方主とならざるべからず。はし書に

龍門にまゐりて瀧のもとにて

とあるはタキノシラ糸といふ語を枕に用ひたる緣由を説明せるに過ぎず。されば此歌も今の格に屬すべきなり

さて此格を創案せしは誰にか。そは容易に知りたけれど此格は拾遺、後拾遺、金葉の時代に亘りて行はれしものと見ゆ。

小式部内侍の歌は金葉に出でたり。フミモミズのズを一本に又に作れるは結句の枕辭なるに心附かでさかしら人の改めたるなり

此時代の家集を閲しなば右四首の外にも猶發見する所あるべし。否勅撰集の中にも余が眼を逸したる歌あるべし

右は明治四十年の春常磐會例會にて談話せしを後に筆録して雜誌たづ園に出だせる舊稿なり。廣く世に知られざめれば此卷二一八〇頁に倒置の枕辭といふことを云へる。因によりて此卷に附載するなり

萬葉集新考卷十一

井上通泰 著

旋頭歌

新室の壁草かりに御座たまはね、草のごと依逢をとめはきみがまにまに

新室壁草刈邇御座給根草如依逢未通女者公隨

壁草は代匠記に

新しく造れる屋はまづ壁をも草を刈てかこふなり

といひ、略解追加に

陸奥南部の黒川盛隆がいはく延喜式七踐祚大嘗祭式云、所作新殿一字、並、並以黒木及草構葺、壁葺以草云々とあれば是壁草なるべしといへり。又同國鹽竈の

藤塚知明がいへるは彼あたりにては新室造て壁などいまだ塗らざるほどは草を刈て其屋をかこひおくを壁草とはいふといへりき
といへり。案ずるに壁を塗りて其乾くを待つ暇なき場合、勞を省き費を節する場合などには壁を塗る代に草を以て屋をかこふ事もあるべけれど一般には新室なりとて壁を塗る前にまづ草を以てかこふべきにあらず。卷四に

黒木とり草もかりつつかへめどいそしきわけとほめむともあらず
とある註にいへる如く今も竹の乏しき地方にては壁下地のこまひに薄をつかふといへばこゝに壁草といへるも薄にて壁下地のこまひの料ならむ○御座を略解にオハシとよめるを古義にイマシに改めたり。オハシは大座オホの約にて當時いまだ用ひられざりし語なればさはよむべからず。さればイマシとよむべし。さてイマシタマハネは往キタマへとなり。來タマへとにあらず。前註皆誤解せり○依逢を從來ヨリアフとよみたれどヨリアフはこゝにかなはず。信逢の誤としてシナフとよむべし。信の音シナシヌの轉そのナにアの韻あれば逢アヒをフに充てたるにてユツルを由移と書けるなどと同例なり○さて契沖は一首を釋して

新室の壁草刈に事よせておはしませ、其草の靡く如く心の依逢未通女はともかくも君に任せむとなり

といひ、雅澄は

吾造る新室の壁草を刈に來て給はれかし、其壁草にかる草の繁生てよりあひなびける如く容儀しなやかにしてうるはしき女は公が心のまゝにまゐらせむ、といふなるべし。さて此歌と次なると二首は女持たる人のもとへ心ありて通ふ男のあるを親の許して聳にせむと思ふ心を告てよめるなるべし。さてその折から此人新室つくりたる故にことよせて云るなるべし

といへり。案ずるにこれと次の歌とは新室造を促す歌にて主意は上三句にありて下三句は副物に過ぎず。即前の歌は草といふ語を取り後の歌は玉といふ語を取りて若き男女のめで喜びぬべき事を云へるのみ

新室を踏フミ靜シヅ子コが手タ玉タマならずも、玉のごと所照テラきミを内へとまをせ

新室踏靜子之手玉鳴裳玉如所照公平内等白世

踏靜子を眞淵はフミシヅノコとよみて

其男の名をシヅノ子といひしに踏靜といひかけたる也、
子などいにしへはいひつ

といひ、雅澄はフミシヅムコとよみて

此は新室の柱を築建て動くことなく揺ぐことなからしめむと堅固に踏靜むる
を云

といへり。雅澄の訓は正しけれど何故にフミシヅムル子といはでフミシヅム子と
いへるか。明にせざるはくちをし。案ずるにこはフミシヅムル子といふべきを連
體格の代に終止格を用ふる古格に據りてフミシヅム子といへるなり(一四七八頁
参照)。さてフミシヅムとは地固チカをするなり。子は女子なり。前註に男子とせるは誤な
り。○所照を舊訓にテリタルとよめるを契沖はテラセルに改めて

今テラセルと改むるは集中の例テリタルとよむべき時は照而有、照而在などや
うにかける故なり

といひ略解は舊訓に従ひ古義は契沖に従へり。案ずるにテリタルとよむべし。次の
歌にテレルを所光とかけるに同じからずや。もしこゝをテリタルとよむべからず

ば次の歌の所光もテレルとはよむべからず。○一首を釋して眞淵は

此男の來て手玉をならして妹にしらせんとするを聞て内へ入給へとさるべき
まかだちにいひかけたる歌ならん

といひ、雅澄は

吾造る新室の柱を踏靜る壯子どもの手玉をゆらゆらとならすよ、さても面白や、
中にその手玉のかがやくごとくうるはしき公ぞわが聲にせむと思ふ人なるを
いで内へ入給へと白せと女に云るか又は從者などに云つくる意にもあるべし
といへり。案ずるに上三句と下三句と意に於て相與る所なし。兩段はただ玉といふ
語によりて相聯れるのみ。格より云はば上三句は一種の序なり。然も主意は上三句
にある事上にいへる如し

はつせの、ゆつきがもとにわがかくせる妻(あかねさし)てれる月夜に人
見ミ點ケムかも

一云人見つらむか

長谷弓槻下吾隱在妻赤根刺所光月夜邇人見點鴨 一云人見豆良牟可

ユツキは茂れる槻なり。そのユは卷十(二二二頁)なるユザサのユにおなじ○アカネサシは准枕辭なり。卷四(六八五頁)にもアカネサシテレル月夜ニタダニアヘリトモとあり○點は監の誤ならむ○古義に

此歌は所由ありて長谷のあたりの山隠れる家に隠妻を率て行てかくしおけるほどよめるなるべし。ただに荒山中の槻の木陰に放ちおけるを云にはあらずといへる如し

ますらをの念亂オモヒタケビテ而かくせる其妻、あめつちにとほりてるともあらはれめやも

一云ますらをのおもひたけびて

健男之念亂而隱在其妻天地通雖光所顯目八方 一云大夫乃思多雞備氏

略解に「或人云。亂は武の誤にてオモヒタケビテならんかといへり」といひ、古義に

念亂而は舊本に一云大夫乃思多雞備氏とあるぞ理協へりとおぼゆる。こゝは或

説に亂字は武の誤にてオモヒタケビテなるべしといへり

といへり。オモヒミダレテをイロイロニ思案シテと譯せむにオモヒタケビテよりは却りて穩なるにあらずや○略解に

日の光の天地を照して隠れなき如く有ともあらはさじと也

といへるはいみじき誤なり。月が天地ニ云々といふべきを前の歌に譲りて月とは云はざるなり○古義に「右の作者おしかへしてふたたびよめるにて云々」といへるは非なり。前の歌は男の歌にて此歌は女の答へたるなり。アラハレメヤモは人ニ見ラレムヤハとなり

惠得メグシトわがもふ妹ははやも死シネ耶、いけりとも吾に應依オモヒタケと人のいはなくに惠得吾念妹者早裳死耶雖生吾邇應依人云名國

惠得を略解にはウツクシトとよみ古義には息緒の誤としてイキノヲニとよめり。案ずるにもとのまゝにてメグシトと四言によむべし。メグシを體言にしてメグミといふはなほカナシを體言にしてカナシミといふが如し。而して悲の字をカナシミともカナシともよむべきが如く惠の字はメグミともメグシともよむべし。メグ

シはカハユシといふことなり(八五三頁参照)○死耶を略解にスギネヤとよみ古義にモを添へてシネヤモとよめり。此句はハヤモシネヤと六言によむべし○應依を從來ヨルベシトとよみたれどヨスベシトとよむべし。ヨスはメアハスといふ意なり。はやく卷九にも

きの國にやますかよはむつまの杜妻よしこさね妻といふからは
とあり○人といへるは親などなり。古義に

人ノイハナクニは妹ガイハヌコトナルヲといはむが如し。人は他人をさすにあらず

といへるは誤なり

(こまにしき)紐のかたへぞ床落爾^{トコニオチニケル}禰留^{ニケル}あすの夜し來なむといはば取置^{トリオキ}待^{マツ}

狛錦紐片叙床落邇^{ニケル}禰留^{ニケル}明夜志將來得云者取置待

コマニシキは枕辭なり(二〇八一頁参照)○紐ノカタへは一對あるものの片方なり

○床落爾禰留を從來トコニオチニケルとよみたれどトコニオチタルまたはトコ

ニオチニタルとあるべし。禰は誤字ならむ○結句を從來トリオキテマタムとよみたれどテはよみ添ふるに及ばず○男の朝歸りし後に下紐の落ちたるを見附けし趣なり

朝戸出のきみがあゆひをぬらす露原早起いでつつ吾も裳^モ下閨^{スササナ}奈

朝戸出公足結乎閨露原早起出乍吾毛裳下閨奈

早起を從來ハヤクオキテとよめるはなつかしからず。ツトニオキテとよむべし○

結句を略解にモスソヌラサナとよみ古義にモノスソヌレナとよめり。主格は吾な

ればモスソヌラサナとよむべし○男の苦を分たむと願へる趣なり。卷七に

吾妹子が赤裳の裾のひづちなむけふの小雨に吾さへぬれな

とあるに似たり

なにせむに命をもとな永く欲^{ホウ}爲^{セシイケレドモ}雖生^{ドモ}わがもふ妹にやすくあはなくに

何爲命本名永欲爲雖生吾念妹安不相

ナニセムニは何ノ爲ニとなり(八五九頁及九九三頁参照)○欲爲を從來ホリセムと

よみたれどホリセムにては上にモトナといへると相副はず。宜しくホリセシとよむべし。○雖生はイケレドモとよむべし。略解古義の如くイケリトモとよみてはアハナクニと相副はず。

息の緒にわれはおもへど人目おほみこそ、ふく風にあらばしましまあふべきものを

息緒吾雖念人目多社吹風有數數應相物

イキノヲニは懸命ニとなり。人目オホミコソの下に得逢ハネといふことを補ひて聞くべし。○數數はシマシマとよむべし(一九七一頁参照)

人のおやのをとめごすゑて守山邊から、あさなさなかよひしきみがこねばかなしも

人祖未通女兒居守山邊柄朝朝通公不來哀

初二は序なり。スエテは居サセテなり。○卷十三に

みもろは人のもる山本邊はあせみ花さき、末邊は椿花さく、うらぐはし山ぞなく

兒守山

とあり。契沖は此歌によりて守山は三諸山の別名なりといへり。○モル山ベカラのカラはヲの意なり。卷九なる

あさぎりの八重山こゆるほととぎす卯花邊からなきてこゆらし

のカラにおなじ。守山邊ヲトホリテとなり。守山邊カラ發シテとにあらず。アサナサナは日毎ニといはむにひとし

あめなる一棚橋何將行わかくさの妻所云足莊嚴

天在一棚橋何將行穉草妻所云足莊嚴

眞淵はアメナルを枕辭とし二三をヒトツタナバシイカデカモユカムとよみて

足纏は下を飾なれば歩行にまゝならぬ故に一棚橋はえ渡りかねなんといへりといひ、宣長は

これは人の上を見てよめる也。道に一つ棚橋の有をいかにしてゆかんとするに人が妻許ゆくといひてあゆひし出立つよと也

といひ、雅澄は行を障の誤としてヒトツタナバシナニカサヤラムとよみて

一、棚橋はたださへあるにたとひ天上にある一棚橋の危きにも何かは障るべき、うつくしき妻が許へとならば脚帯して出た、む、といふなるべし

といへり。まづ一、棚橋の語意はいかがが唯一つある棚橋といふことにや。又は棚一つ渡せる橋といふことにや。次にアメナルヒトツタナ橋とつづけるをいかがが心得べき。眞淵の説はヒトツのヒ(且)にかゝれる枕辭とせるにてともかくも筋は通りたれど雅澄の如く天上ニアルといふ意とせむに棚橋の所在を示すにアメナルといひてはあまりに漠然たらずや。案ずるに一、棚橋は乙棚機の誤字なるべく又何將行は迎耶行の誤字なるべし。もし然らば上三句はアメナルオトタナバタラムカヘニヤユクとよむべし

五六を眞淵はツマガリトヘバアユヒスラクヲとよみ、宣長は莊嚴を結發の誤としてツマガリトイヒテアユヒシ、タタムとよめり。案ずるに足を船の誤としてツマガリトイヒテフネヨソハクモとよむべし。莊嚴は佛語にてよそひ飾る事なり。○一首の趣は若き男の妻がり行くといひて船よそひするを見て牽牛の妻迎船の故事を思浮べて

サラバ織女ヲ迎ヘニ行クナラムといへるなるべし

やましろの來背のわく子がほしといふわを、あふさわにわをほしとい

ふ開木代來背

開木代來背若子欲云余相狹丸吾欲云開木代來背

右十二首柿本朝臣人麿之歌集出

來背は久世にて地名なり。ワク子は青年なり(四〇七頁參照)。アサワニははやく卷八(一五八〇頁)にアサワニタレノ人カモ手ニマカムチフとありて己ガ分ニ過ギテといふことなり。○第六句はもと來背若子とありしを初二に開木代來背若子とあるよりまぎれて開木代來背となれるならむ。さらばクゼノワクゴガとよむべし

○古今集誹諧歌に

足引の山田のそほづおのれさへわれをほしといふうれはしきこと

又催馬樂の歌に

やましろの狛のわたりの瓜つくりわれをほしといふいかにせむ

とあると相似たり。○卷七にも開木代來背社とあり。ヤマシロを開木代と書ける所
以は未考へず。契沖の説あれどうべなひがたし

崗前^{ヲカザキノ}たみたる道^{ヒト}を人莫^{ナセキノ}通^トありつつもきみが來^{キタラム}よき道にせむ

崗前多未足道乎人莫通在乍毛公之來曲道爲

崗前は舊訓に従ひてヲカザキノとよむべし。古義にはヲカノサキとよめり。岡の鼻
なり。タミタルはコギタムルなどのタムルと同語にてメダレルなり。古義に「タはそ
へことば、ミはモトホリのつづまれるなり」といへるは非なり。○第三句を従來字の
まゝにて人ナカヨヒソとよめれど通は塞の誤にて人ナセキノネとよむべきなら
む。不用トシテ塞^セキフサグナとなり。○アリツツモは卷四に

佐保河のきしのつかさのしばなかりそねありつつも春しきたらばたちかくる
がね

又卷七に

此崗に草かるわらははしかなかりそねありつつも君が來まさむ御馬草にせむ
とあり。ソノママニシテ置イテとなり。雅澄が來にかけて「わが知れる人のありあり

つつ吾方へ通ひ來ます時」と釋せるは誤れり。○來はキタラムとよむべし。従來キマ
サムとよめり。君といはば必敬語を用ふべきものと思ふべからず。君が行クなどい
へるを思へ。ヨキミチは人目をよくる道なり。即閒道なり

(たまだれの)小簾之^ス寸^チ鷄^ニ吉仁^キいりかよひこね(たらちねの)母がとはさば
風とまをさむ

玉垂小簾之寸鷄吉仁入通來根足乳根之母我問者風跡將申

女の男にいへる歌なり。第二句を従來ヲスノスケキニとよめり。さて眞淵は「スキを
延てスケキといへり」といへれど語は妄に延ぶべきものにあらず。もし言足らずば
六言にてもあるべく又ヲスノスキヨリとも云ふべし。又雅澄は「スキをスケキとい
ふはシゲキをシゲケキ、アツキをアツケキ、サムキをサムケキなどいふに同じ」とい
へれどシゲキ、アツキ、サムキをシゲケキ、アツケキ、サムケキといふこと無きのみな
らず、たとひ然いふべくともシゲキなどとスキとは語品異なれば證例とはすべか
らず。おそらくはもと雛吉從などありて一本に據りて吉の傍に寸と書きたりしが
やうやうに誤まられて今の如くなれるならむ

(うち日さす宮ぢにあひし人妻^{ユエ}妬(たまのをの)おもひみだれてぬる夜しぞ多き

内日左須宮道爾相之人妻妬玉緒之念亂而宿夜四曾多寸

ミヤヂは宮城にかよふ道なり○妬を舊訓にユエニとよめり。略解追加に濱臣が説を擧げて

妬は妬の訛なり。字書にユエとよむべきよしはなけれど遊仙窟に故々をネタマシゲニと訓じ又字鏡に故々^{ゲニ}とあるを思へばいにしへは故妬を通じ用ひしものと見ゆ。されば互に相通はしてユエといふにも妬の字を用ひしなるべし○撮意

といひ訓義辨證下卷(四二頁)には

妬を妬とかけるは六朝の俗字なるべし。、、人妻の我おもふまゝならぬをねたくおぼゆる意をもてかける文字なるべし。さるによりて人子妬また人妻妬とある所にかぎりてただにユエといふべき所に用ゐたるはなき也といへり。なほ考へよ○此歌は卷七なる

うち日さす宮道をゆくに吾裳はやれぬ玉の緒のおもひみだれて家にあらましを

といふ歌と、もと二首一聯なりしにあらざるか(一三六五頁参照)

(まそかがみ)みしがと念^{オモイ}妹^{イモモ}相^{アハヌ}可^カ聞^カ(たまのをの)たえたる戀のしげきこのごろ

眞十鏡見之賀登念妹相可聞玉緒之絶有戀之繁此者

ミシガは見テシガなり。古今集東歌にもカヒガネヲサヤニモ見シガとあり○二三句を略解にはミシガトモヒシイモニアヘルカモとよみたれどアヘルカモとよみては五六句と相かなはず。古義にはミシガトオモフイモニアハヌカモとよめり。之に基づきてイモモとよむべし。こゝのアハヌカモはアヘカシの意なればなり○此者は比者の誤なり

うなばらの路に乗れれやわがこひをりて(大舟の)ゆたにあるらむ人の兒ゆゑに

海原乃路爾乘哉吾戀居大舟之由多爾將有人兒由惠爾

右五首古歌集中出

海原ノ路ニ乘リタレバニヤ人ノ娘故ニワガカクユタニアルラムとなり。此歌などはワガゴヒヲリテの一句を省きて短歌とすべかりしなり。否旋頭歌とする爲に不用なる一句を挿みしによりて中々にきゝまどはるゝなり。ユタニアルラムはオチツカズアルラムとなり(卷七一四二頁ユタニタユタニ参照)

正述心緒

次なる寄物陳思に對して設けたる目なり。タダニ心緒ヲ述ベタルとよむべし。述心緒は陳思におなじくタダニは物ニ寄セテのうらなり。即物ニ寄セナドセズシテとなり。所謂六義に當てば正述心緒は賦に當り寄物陳思は比と興とに當るべし

(たらちねの)母之手放かくばかりすべなき事は未爲國

垂乳根乃母之手放如是許無爲便事者未爲國

第二句は舊訓に従ひてハハガテハナレとよむべし(略解にはカレテとよめり。卷五和爲熊擬述其志歌九五八頁)に波波何手波奈例とあればなり。母ノ手ヲ離レテヨリとなり。○結句を従來字のままにてイマダセナクニとよめり。案ずるに爲は相の誤ならむ。さらばイマダアハナクニとよむべし。アハナクニは逢ハヌ事ヨとなり。卷四に

黒髪に白髪まじりおゆるまでかかる戀には未相爾

とあり

人所寐うまいはねずてはしきやしきみが目すらをほりてなげくも

或本歌云きみを思ふにあけにけるかも

人所寐味宿不寐早敷八四公目尙欲嘆

或本歌云公矣思爾曉來鴨

初句を舊訓に人ノヌルとよめるを宣長は

ヌルと訓では所の字餘れり。ナスとよまん

といへり。ナスは寢タマフまたは寢シムといふ事なれば(八五八頁参照)こゝはナス
とはいふべからず。宜しく古義に従ひて所を衍字とすべし。或は上なる所照(所光の
如く所をルに充てたりとも見べし)○スラは主語を強むる辭なり(一九七九頁参照)。
古義に「相宿するはさるものにてその目さへをといふ意なり」といへるは非なり。目
ヲホルは逢ヒタガルといふ事なり(二一一七頁参照)

こひ死なばこひもしねとや(玉梓の)路ゆく人の事告兼コトモツゲナク

戀死戀死耶玉梓路行人事告兼

結句を略解にはコトモツゲケムとよめり。宣長の説に従ひて兼を無の誤として(二
本に無とあり)コトモツゲナクとよむべし。君ノ傳言モキカセヌ事ヨとなり。事は言
の借字なり。古義にツゲナキとよめるは非なり。ツゲナキといふ辭は無し

心には千たびおもへど人には吾戀嬢みむよしもがな

心千遍雖念人不云吾戀嬢見依鴨

略解古義にワガコフツマヲとよみたれどテニヲハの無き方まされり。宜しくワガ

コフルツマとよむべし

かくばかり戀物しらませば遠トホクノミ可見ミテアラマシモラフ有物

是量戀物知者遠可見有物

戀物を略解にはコヒムモノトシ、古義にはコヒムモノゾトとよめり。舊訓に従ひて
コヒシキモノトとよむべし。○四五を略解にトホクミルベクアケルモノヲとよ
み、古義にトホクミツベクアケルモノヲとよめり。可を耳の誤としてトホクノミ
ミテアラマシモノヲとよむべし。マセバといひてアケルモノヲといはむは語法
上許されざる事なり

何時イハシモこひぬ時とはあらねども夕かたまけて戀無コヒハスナシ乏

何時不戀時雖不有夕方枉戀無乏

初句を考にはイツハトハとよみ略解古義には卷十三に何時橋物イツハシモコヒヌ時トハア
ラネドモとあるに據りてイツハシモとよめり。後者に従ふべし。○結句を考には乏
を爲の誤としてコヒハスベナシとよみ古義にはもとのまゝにてコフハスベナシ

とよめり。もとのままにてコヒハスベナシとよむべし。下にもモトモ今コソ戀ハスベナキとあり。○古今集秋上に

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞもの思ふことのかぎりなりける

とあると相似たり。○枉を清音のマケテに借れるはめづらし

是耳戀度(カクノミシコヒヤワタラム)たまきはる(命もしらず)歳(トシ)經管

是耳戀度玉切不知命歳經管

是耳を略解にカクシノミとよみ古義にカクノミシとよめり。集中に如此耳、如是耳とかけるを従來或はカクシノミ或はカクノミシ、或はカクノミニとよめり。右のうちカクノミニは卷十六に如是耳爾と書ける例あり、又カクノミシは卷九卷十に如是耳志、卷十三に如是耳師と書ける例あれどカクシノミは然よむべき適例なし。さればカクノミシ或はカクノミニとよむべし。但兩者の別は未研究を了せず。卷三(五五六頁及五六八頁)なる如是耳アリケルモノヲをカクノミニと訓めるは卷十六に如是耳爾アリケルモノヲと書けるに據り、卷四(七六九頁)なる如此耳コヒヤワタラムをカクノミニと訓めるはカクノミニ、カクシノミ兩訓のうちカクシノミを斥け

てカクノミニに就きたるのみ。○第二句及第五句を略解に

こひやわたらむタマキハル命モシラズとしをへにつつ

とよみ古義に

こひしわたればタマキハル命モシラズとしはへにつつ

とよめり。前者に従ふべし。イノチモシラズは逢フマデ命ガアルカ無キカモ知ラズ

となり。○一首の語例は卷四に

かくのみし戀(コヒ)哉(ヤ)將(ツタ)度(タ)あきつ野(ノ)にたなびく雲(ノ)のすぐとはなしに

又卷九に

かくのみし戀(コヒ)思(シ)渡(ワタ)者(シ)たまきはる(命)も吾(ハ)をしけくもなし

とあり

吾ゆのち生れむ人はわがごとく戀する道にあひこすなゆめ

吾以後所生人如我戀爲道相與勿湯目

アヒコスナユメは決シテ逢ウテクレルナとなり

ますらをのうつし心も吾はなしよるひるといはずこひしわたれば

健男現心吾無夜晝不云戀度

ウツシ心はウツツ心にて即正氣なり。古義に「つよくたしかなる心を云」といへるは當らず。コヒシのシは助辭なり

何せむに命つぎけむわぎもこにこひざるさきにしましものを

何爲命繼吾妹不戀前死物

ナニセムニは何ノ爲ニなり。命ツギケムは命ヲツナギケムとなり

よしゑやしきまさぬきみを何せむに不厭アカズモ我はこひつつをらむ

吉惠哉不來座公何爲不厭吾戀乍居

ヨシエヤシはヨシに同じ。不厭を略解古義にイトハズとよめり。宜しくアカズモとよむべし。○ナニノ爲ニワガ戀居ラム、ヨシヤコヒジとなり。ヨシエヤシの下にコヒジを省けるなり

見度ミタセバちかきサドミ渡をたもとほり今や來ますとこひつつぞをる

見度近渡乎回今哉來座戀居

初句を略解にミワタセバとよめるを古義にミワタシノに改めて

打向ひ見渡さるゝ處をミワタシといふなり。こゝはミワタセバとよむはわろし

といへり。又第二句の渡について略解に「アタリをワタリといふこと古有けん」といへるに對して古義に

渡は河などのあるによりて云るなるべし。略解にアタリといふことに解なせるはひがごとなるべし。すべてアタリをワタリと云こと古になきことなればなりといへり。案ずるに卷七に

視渡者ちかき里廻をたもとほり今ぞわがこしひれふりし野に

といふ歌あり。今の歌の渡ももと里廻とありしが上なる見度の度よりまぎれて渡となれるにあらざるか。渡津のあなたに男のすめるをチカキ渡とはいふべからざる故なり。されば初二はミワタセバチカキサトミヲとよむべし。そのヲはナルニなり。○タモトホリを釋して略解に「近きあたりながら人目をよくとて廻り道をして來るを云々」といひ古義に「人目をはばかりてよき道をしてまはり來ますにやと待つゝぞ居るとなり」といへれどタモトホリは道の回りたればそれに從ひて行廻る

なり

早敷哉^{ウレタキヤ}たがさふれかも^{タマサ}路見遺^ミきみが來^キまささぬ
早敷哉^{ウレタキヤ}誰障鴨玉^ニ梓路見遺^ミ公不來座

初句を從來ハシキヤシとよめり。さて略解に「下のキミをいふ也」といひ古義にも「第一句は第五句の上につして心得べし」といへれど三句十九言を隔ててキミにいひかくべきにあらず。おそらくは慨哉などを誤れるにてウレタキヤとよむべきならむ。タガサフレカモはタガ妨グレバニカとなり。○第四句を略解古義にミチミワスンテとよみたれどさては一首の筋通らず。人ありて妨ぐる時は道を見忘れずとも來らざるべく又道を見忘れれば人が妨げずとも來らざるべければなり。されば略解には人の妨ぐると道を見忘れたるを別事としてタガサフレカモ、道ミワスレテ君カ來マサヌとカを清みてよみたれど、もし別事とすべくば人カモサフル、道カ忘ルルとを相向はせ、さて君ガ來マサヌといひて雙方を束ぬべきなり。おそらくは第四句に誤字あるべし。試にいはいはば見遺は不遠の誤にてミチハチカキヲならむか

公目見欲^{キミガノミマクホシキニ}この二夜千歳のごともわがこふるかも

公目見欲^{キミガノミマクホシキニ}是二夜千歳如吾戀哉

初二を略解にはキミガメヲミマクホリシテとよみ古義にはキミガメノミマクホシケミとよめり。ホシケミといふ辭は無し。宜しくキミガ目ノ見マクホシキニとよむべし

(うちひさす)宮道を人はみちゆけどわがおもふ^{ヒトハ}公ただひとりのみ

打日刺宮道人雖滿行吾念公正一人

公を從來字のまゝにてキミハとよみたれど人の誤としてヒトハとよむべし。○語例は卷四に

人さには國にはみちて、おぢむらのかよひはゆけど、わがこふる君にしあらねば云々

とあり

世の中は常如^{カク}△のみとおもへども^{ウツテ}半手不忘^{ウツスレズ}なほこひにけり

世中常如雖念半手不忘猶戀在

第二句を眞淵はツネカクノミトとよめり。如の下に少くとも此をおとせるならむ

○半手を眞淵は半多の誤としてハタとよみ、さて

手は言下に置てタと訓む例なし

といひ、略解には

按に人麿集にかな書なき例なれば半手など書べきいはれなし。全誤字ならん。一字の二字になれるものならんか

といひ、古義には

吾者不忘などあるべきところなり

といへり。按ずるに哥手の誤としてウタテワスレズとよむべし。ウタテはイブカシヤなり

わがせこはさきくいますと遍來我告來人來鴨

我勢古波幸座遍來我告來人來鴨

第三句以下に來の字三つあり。誤字ある事明なり。干蔭は遍來を適喪の誤として

たまたまも、われにつげこむ、人のこぬかも

とよみ雅澄は遍來を遍多の誤、告來を告乍の誤として

たびまねく、あれにつげつつ、人もこぬかも

とよめり。按ずるに遍來を舊訓にカヘリキテとよめるによりて還來の誤とし、我告來の來を衍字とし、第三句よりうつれるならむ。結句の來を無の誤として

かへりきて、われにつげなむ、人のなきかも

とよむべきか

(あらたまの)五年雖經わがこふる跡無戀不止怪

龜玉五年雖經吾戀跡無戀不止怪

清水濱臣は第二句の五を衍字としてトシハフレドモとよめり。げに然るべし○四

五を略解にはシルシナキ戀ノヤマズアヤシモとよみ古義にはアトナキ戀ノヤマヌアヤシモとよめり。案ずるに第四句は卷三なる大伴家持悲傷亡妻作歌に

いひもかねなづけもしらに跡無世のなかなればせむすべもなし

とあるに據りてアトナキ戀ノとよむべし。そのアトナキはやがてハカナキなり(五

六七頁。古義にアトナキコヒノとよみながら「しるしのなきことなり」といへるは未
眞淵の雰圍氣を離れずといふべし。○結句はヤマヌアヤシサとよむべし

いはほすらゆきとほるべきますらをも戀ちふ事は後悔在ノチクイ

石尙行應通建男戀云事後悔在

結句を略解古義にノチクイニケリとよめり。案ずるにノチクイニケリと過去にい
ふべき處にあらず。されば舊訓の如くノチクイアリとよむべし。さて一首の主格
はノチクイなればマストラヲモはマストラヲニモの略、コヒチフコトハは戀チフ事
ニハの略とすべし。建男の建は健の通用なり。上にも二處(二二三二頁及二二五〇頁)
マストラヲを健男と書けり。○初二は巖スヲ押分行キテ悔イザルベキとなり。こゝに
悔イザルといふことを省きたりとせでは一首の筋通らず

日位人しりぬべしけふの日の如千歳チトセノゴトクありこせぬかも

日位人可知今日如千歳有與鴨

第四句は舊訓に従ひてチトセノゴトクとよむべし(略解にはチトセノゴトモとよ
めり)○日位を舊訓にヒクレナバとよめり。さてその位の字一本に低とあり。略解古

義には低を正しとせり。然も解釋に困じて「日暮て却て人目多き事のよし有て」など
いへり。案ずるに日位は考にいへる如く日並の誤としてヒナラベバとよむべし。日
ナラベバは卷六に

茜さす日ならべなくにわが戀は吉野の河の霧にたちつつ
卷八に

あしひきの山ざくら花日ならべてかくさきたらばいとこひめやも
とありて日ヲ重ネバすなはち逢フ度ノ重ナラバとなり。○ケフノ日といへるは夜
に對する晝にあらず。ただ今日といふ事なればこゝにては今夜ノといはむにひと
し

立座態不知タチケムタドキモシラおもへども妹につげねば間使も來ず

立座態不知雖念妹不告間使不來

初二を略解にタチキスルワザモシラエズとよみ古義にタチテキテタドキモシラ
ズとよめり。卷十二(二〇八二頁)なる七夕長歌の立坐多土伎乎不知と共にタチモキモ
タドキヲシラニとよまむかと思へど卷十二に立而居爲便乃田時毛イマハナシと

而の字を挿み書きたる例あればタチテキムタドキモシラニとよむべし。立テリテサテスワラムスベモ知ラズといふ意ならむ

(ぬばたまの)この夜なあけそ(あからひく)朝ゆくきみを待苦^{ミムガクルシサ}

烏玉是夜莫明朱引朝行公待苦

待苦を略解古義にマテバクルシモとよみて略解に「朝に別れては又來るを待間のくるしき也」といへり。誤字ありとおぼゆ。待を看の誤としてミムガクルシサとよむべきか。拾遺集に

うばたまのこよひなあけそあけゆかば朝ゆく君を待つくるしきに(一作まつがくるしき)

とあるは當時はやく結句に誤字ありし證とすべきのみ

戀するに死^シするものにあらませば我身は千たびしにかへらまし

戀爲死爲物有者我身千遍死反

卷四なる笠女郎の歌に

おもふにし死^シするものにあらませば千たびぞ吾はしにかへらまし
とあるは今の歌を借りたるなり○シニカヘルはくりかへし死ぬるなり。死を反復するなり

(玉響^{スバタマ})きのふのゆふべ見しものをけふのあしたにこふべきものか

玉響昨夕見物今朝可戀物

初句を略解にタマユラニとよめるを古義に「さる詞のあるべくもあらず」といひて烏玉の誤としてスバタマノとよみ、さて

然るを今まで注者等の舊本の誤をうけて解來れるはいかにぞや。あはれ古書に眼をさらす人の絶て久しくなりにけるこそあさましけれ
と且誇り且嘆きたり。雅澄の發見を是認すべく従ひて之を例としてタマユラニとよめる歌を抹殺すべし

中々に見ざりし從^{ヨカハ}相見ては戀心益^{コトシムコトコトシテ}おもほゆ

中中不見有從相見戀心益念

従を略解にヨリモ、古義にヨリハとよめり。古義に従ふべし。○戀心を略解古義にコヒシキ心とよめり。宜しくコヒシム心とよむべし。○益を古義にイヨヨとよめり。舊訓に従ひてマシテとよむべし。卷八(一六三八頁)なる長歌に益而所思と書けり。

(玉梓の)道ゆかずしてあらませば **惻隱** 此有戀不相

玉梓道不行爲有者惻隱此有戀不相

四五を略解古義にネモコロカカルコヒニハアハジとよめり。宜しく惻隱を衍字としてカカルコヒニハアハザラマシヲとよむべし。○さて惻隱はもと前の歌の戀心に代るべき字にて前の歌の次に一云惻隱などありしが誤りて此歌の行中に入れるならむ。ネモコロゴロニとよむべし。

朝影に吾身はなりぬ(玉垣入)ほのかにみえていにし子故に

朝影吾身成玉垣入風所見去子故

朝影について契沖は

朝には鏡を取て見れば朝影とは云へり。戀瘦て影の如くに成るなり

といひ干蔭は

朝影は瘦衰へて朝日にうつりて見ゆる影の如くになれるをいふ

といへり。略解の説に従ふべし。○清音の垣をタマカギルのカギに借れるはアレツガムのツグを衝と書きシジクシロのシジを完と書きイブカシを言借と書きナベを苗と書けると同例なり

行行^{イテトヤク}あはぬ妹ゆゑ久方の(天)の露霜にぬれにけるかも

行行不相妹故久方天露霜沾在哉

初句を従来ユケドユケドとよみたれど待待の誤としてマテドマテドとよむべし。たまさかにわがみし人をいかならむよしをもちてか亦一目みむ

玉坂吾見人何有依以亦一目見

タマサカニは偶然なり。卷九(一七四〇頁)なる詠浦島子歌にも

わたつみの神のむすめに、たまさかにいこぎむかひて
とあり

しまらくも見ねばこひしきわぎもこを日日來事繁^{ヒニヒニキナバコトシゲケム}

暫不見戀吾妹日日來事繁

ワギモコヲは我妹子ナルガとなり。四五を略解古義にヒニヒニクレバコトノシゲケクとよめり。宜しくヒニヒニキナバコトノシゲケムとよむべし。キナバは行キナバなり。コトノシゲケムは人ノ口ガウルサカラムとなり

年^{タマ}きはる^{マデトタノミタルキミニヨリテバコトシゲケトモ}及世定^{マデト}恃公依^{マデト}事繁

年切及世定恃公依事繁

第二句を從來ヨマデサダメテとよめり。定を竟などの誤としてヨノハテマデトとよむべし。身ノ終マデトの意なり。○恃を略解古義にタノメタルとよみたり。改めてタノミタルとよむべし。○四五を略解古義にキミニヨリテシコトノシゲケクとよめり。宜しくキミニヨリテバコトシゲケトモとよむべし。君ノ爲ナラバヨシヤ人ノ口ガウルサカラウトモとなり。卷四なる

今しはし名のをしけくも吾はなし妹によりてばちたびたつとも

の四五と同格なり。○此歌は前の歌の答なり。年は略解に従ひて玉の誤とすべし

(あからひく)はだもふれずて^{ネズレドモケシキコロヲ}雖寐^{ネズレドモ}心^{ケシキコロヲ}異^{ケシキコロヲ}わがもは^{ケシキコロヲ}なく^{ケシキコロヲ}に

朱引秦不經雖寐心異我不念

雖寐はネズレドモとよむべし(從來ネズレドモとよめり)。心異は古義に異心の顛倒としてケシキコロヲとよめるに従ふべし。心ヲオモフは今心ヲモツといふにひとし(一六六二頁参照)。○女の許には行きしかど故ありて獨宿せしなり。○經はフルヘズとはたらけばフレズを不經とは書くべからざるに似たれど大寶令に經本屬(本屬ニフレテ)經本部(本部ニフレヨ)などあるを見れば經はいにしへフル、フレテともはたらきしなり。但フルル、フレテの方は今トドケルといふ意なる如し。國史大系本の如きはフル、ヘテとよむべきものと混同せり。たとへば公式令なる事經奏聞を奏聞ニフレテとよみたれどこは奏聞ヲヘテとよむべし。又選叙令なる其經八考者を八考ヲ經ラバとよみたれどフラバといふ活は無し。こはソノ八考ヲヘタル者ハとよむべし

いでいかに^{ココクケ}極^{ワガ}太^{ワガ}甚^{ワガ}利^{ワガ}心^{ワガ}の^{ワガ}う^{ワガ}する^{ワガ}ま^{ワガ}でも^{ワガ}ふ^{ワガ}戀^{ワガ}故^{ワガ}

伊田何極太甚利心及失念戀故

極太甚について宣長は

此末に大船ニマカデシジヌキコグホドモ極太コヒシ年ニアラバイカニといふもネモコロと訓べければこゝもネモコロゴロニと訓べし
といへり。案ずるにネモコロニ戀フとはいふべくネモコロニ戀シとはいふべからず。されば下なる大船の歌の極太はココダクとよむべく今は極太甚を極太吾の誤としてココダクニワガとよむべし。○ウスルマデモフのモフはイデイカニの結なり。されば上四句の意はマア、ドウシテカク甚シク利心ノウスル迄ニ我思フ事ゾとなり。こゝのイデはマアと譯すべし。イカニは後世のイカデなり。○結句を略解古義にコフラクノユエとよみたれど上にオモフとあれば結句にその相手を出すべきなり(モノモフとあらばこそ結句はコフラクノユエともあるべけれ)。されば戀故は不相子故などの誤にあらざるか

こひしなばこひもしねとやわぎもこが吾家の門をすぎてゆくらむ
戀死戀死哉我妹吾家門過行

妹があたり遠見者あやしくも吾戀△相依無
妹當遠見者怪吾戀相依無

二四五を略解古義にトホクシミレバ、、ワレハゾコフルアフヨシヲナミとよめり。第二句は舊訓に従ひてトホクミュレバとよむべく結句は考に従ひてアフヨシナキニとよむべし。又第四句は吾戀の下に息又は止を補ひてワガコヒヤミヌとよむべし

玉久世清河原みそぎして齋命妹が爲こそ

玉久世清河原身祓爲齋命妹爲

初二を舊訓にタマクゼノキヨキカハラニとよめり。さて楫取魚彦の續冠辭考に

四言の例も多ければタマクセとよむべし。、、玉クセは玉クシロをつづめいへるならん。シロ、反ソをセに通はしたらん。、、玉を飾れる釧は清くみゆればキヨキ河原とつづけしならん

といひ、宣長は山代久世能河原の誤として

ヤマシロノクゼノカハラニと訓べし

といひ、千蔭は之に附記して

されどこゝは能の字を添べき書ざまにあらず考ふべし

といひ、雅澄は宣長の説に據り千蔭の説に顧みて

山背、久世、河原とありけむを山を玉に背を清に誤りたるよりつひにみだれしならむ

といへり。又山田孝雄氏は

新撰字鏡に灘加波良久世又和太利世又加太とあるカハラとクセとは二語にてこゝのクセはその證とすべし。久世は河原と同義にして水石相交る處をいふものと考へらる。その石の清きをたとへて玉クセといひやがて又キヨキ河原ニと繰返したるものならむ(大正五年五月私信)

といはれき。案ずるに久世清を清久世の顛倒としてタマキヨキクゼノカハラニとよむべし。玉は小石なり。○第四句を略解にイハフイノチモとよみ古義にイハフイノチハとよめり。案ずるにミソギシテを受けたれば齋はイノルとよむべく命は調

を量りてイノチモとよむべし。○四五の語例は卷十二に

ときつ風ふけひの濱にいであつあがふ命者妹之爲社

とあり

思依見依物有ひと日へだつをわすると念はむ

思依見依物有一日間忘念

上三句を略解にオモフヨリミルヨリモノハアルモノヲとよみ古義には有を何爲の誤としてオモヒヨリ見ヨリシモノヲナニストカとよめり。案ずるに思社[△]依宿物[△]何有の誤としてオモヘヨソヨリネシモノヲイカナレカとよむべきか。こは試に言ふのみ。○ヒト日へダツヲは後世ならばヒト日へダツルヲとあるべきなり

かきほなす人はいへども(こまにしき)紐^{ヒモ}解^{トキ}開^{アケ}きみならなくに

垣廬鳴人雖云狛錦紐解開公無

カキホナスはシゲクといふことなり。卷九(一八六三頁)にもカキホナス人ノトフ時とあり。○紐解開を略解古義にヒモトキアケシとよめり。紐にアクルといはむは穩

ならねど次にも紐解開ユフベダニとあり又下に君キマセルニ紐不開寐また卷十
二に裏紐開コフル日ゾオホキまた卷十七にユヒテシ紐ヲ登伎毛安氣奈久爾また
卷二十に比毛等伎安氣奈タダナラズトモとあり

(こまにしき)紐解開ゆふべ戸しらざる命こひつつかあらむ
狛錦紐解開夕戸不知有命戀有

第二句を從來ヒモトキアケテとよめり。さて宣長は

ユフベトモ知ラザル命コマニシキ紐トキアケテコヒツツカアラムと句の次第
をかへて心得べし

といひ略解古義共に之に従ひたり。案ずるにヒモトキアケムとよみて句の順序の
ままに心得べし。即

妹ガ紐ヲトキアケムソノ夕ヲダニハカリ知ラザル命モテカク戀ヒツツカアラ
ム

といへるなり。○戸は略解に谷の字の誤なるべしと云へり

百さかの船潜納やうらざし母はとふとも其名はのらじ

百積船潜納八占刺母雖問其名不謂

モモサカは百尺にて船の長さなり。第二句を略解にフネカヅキイルルとよみ古義
に潜を漕の誤としてフネコギイルルとよめり。古義に従ふべし。初二はヤウラザシ
のウラにかゝれる序なり。○ヤウラザシは占なひて男の名を指すなり。サを濁りて
唱ふべし。ヤは反復の意にてウラザシにかゝれるなり。占のみにかゝれるにあらず

眉根かき鼻ひ紐解待哉いつかもみむと念吾君

眉根削鼻鳴紐解待哉何時見念吾君

マヨネカキははやく卷四に

いとまなく人の眉根をいたづらにかかしめつつも逢はぬ妹かも

又卷六に

月たちてただ三日月の眉根かきけながくこひし君にあへるかも
とあり。人に逢はむ呪なり。ハナヒはクサメシなり。紐解は舊訓の如くヒモトキとよ
むべし。略解古義にヒモトケとよめるはわろし。鼻ヒルも紐トクもおなじく人に逢
はむ呪なり。契沖は毛詩終風に寤メテ言寐ラレズ言ヲ願ヘバ則嚏ルとあるを引き

たれどそは人が我ヲ思へば我ハクサメスといへるにて今の俗に一褒メラレニク
ササレとかいふ諺の本源にてこゝにハナヒとあるとは相與からず〇三五を略解
にマテリヤモ、、オモヘルワギミとよみ、古義にマテリヤモ、、オモヒシワ
ギミとよめり。案するに第三句は舊訓に従ひてマツラムヤとよむべく、結句は吾念
君の顛倒としてワガオモフキミとよむべし

君にこひうらぶれをれば悔^{アヤシクモ}我裏紐^{ヒモトケテ}△結手徒^{タニレモ}

君戀浦經居悔我裏紐結手徒

考に悔を怪の誤、徒を倦の誤としてアヤシクモワガシタヒモヲユフテタユシモと
よみ略解古義は之に従へり(但古義にはシタヒモノとよめり)卷十二に
みやこべに君はいにしをたれとけかわが紐緒乃ゆふ手たゆしも

古今集戀一に

おもふともこふともあはむものなれやゆふ手もたゆくとくる下紐
とあると参照すれば略意義はさとりなれどなほ筋のとほらざる所あり即第四句
にまづトクルといふことを言はざるべからず。されば我を衍字とし紐の下に解の

字を補ひてシタヒモトケテとよむべし〇さて此歌は前の歌の答ならむ〇經をフ
レに借りたり

(あらたまの)年者^{ハスレド}竟^{ハスレド}杼^{ハスレド}しきたへの袖かへし子を忘れてもへや
璞之年者竟杼敷白之袖易子少忘而念哉

第二句を略解古義にトシハハツレドとよみさて略解に「春逢て其年は暮れども忘
れぬといふ也」といへれどさては辭足らず。宜しく竟を経などの誤としてトシハハ
ツレドとよむべし〇ソデカヘシ子は袖ヲサシカハシシ女となり。ワスレテモヘヤ
はただ忘レムヤとなり(六二九頁参照)

しろたへの袖をはつはつ見柄^{ミシカラニ}かかる戀をも我はするかも

白細布袖小端見柄如是有戀吾爲鴨

ハツハツは卷七(一三八六頁)にも小端^{ハツハツ}ニ見テカヘリテ戀シとあり。意はハツカニに
同じ〇見柄は舊訓に従ひてミシカラニとよむべし(略解にはミテシカラとよめり
わぎもこに戀^{コヒテスベナ}無^ナ之^ノいめにみむと吾はおもへどいねらえなくに

我妹戀無之夢見吾雖念不所寐

無之を略解に無爲の誤とせり。古義には無乏の誤として

乏字スベとよむ義は未詳ならねど無乏無乏などあればいにしへスベと云に用

ひし字なるべし

といへり上七頁なる何時不戀時の處に。さて第二句を舊訓にコヒテスベナミと

よめるを略解古義に卷十二に

吾妹兒に戀爲便名鴈胸をやき朝戸あくればみゆる霧かも

又卷十七に

わがせこに古非須弊奈賀利あしがきのほかになげかふあれしかなしも

とあるによりてコヒスベナカリとよみたり。案ずるにたとひコヒテスベナミとい

ふことをコヒスベナカリといひしことありとも現に集中にコヒテスベナミとい

へる例あればたとへば卷十七九六にワギモコニ戀而爲便莫とあり。今も耳近きに

從ひてコヒテスベナミとよむべし。○之はげに諸本に乏とあり

故もなくわがした紐ぞ令解人莫△知ただにあふまで

故無吾裏紐令解人莫知及正逢

第三句を略解にトケシムルとよめるを古義に中山巖水の説に據りて令を今の誤

としてイマトクルとよめり。之に従ふべし。○第四句を略解にヒトニシラユナ古義

にヒトニナシラセとよめり。莫の下に所の字を補ひてヒトニシラユナとよむべし。

そのナは自禁めたるなり。○下紐のおのづから解くるは戀人に逢ふ祥にて、もし其

を人に知らるゝ時は驗なしなどいふ俗信ありしにこそ

こふること意追不得いでゆけば山川知らず來にけり

戀事意追不得出行者山川不知來

第二句を舊訓にナグサメカネテとよめり。眞淵は舊訓に従ひて追を進の誤とし雅

澄は追を遣の誤としてココロヤリカネとよめり。案ずるに追を遣の誤として義訓

にてナグサメとよむべし。コフル事ヲを受けて更に心ヲヤリカネとはいふべから

ざればなり。さて上三句は妹を訪ひて得逢はざりし趣なり。イデユケバは出來レバ

なり。○山川を眞淵がヤマモカハヲモとよみ雅澄がその例に卷九過足柄坂見死人

作歌(一八三八頁)なる父妣毛妻矣毛ミムトを引ける共によるし

寄物陳思

をとめら乎袖ふる山のみづ垣の久しき時ゆ念來吾等者

處女等乎袖振山水垣久時由念來吾等者

卷四に柿本朝臣人麻呂歌三首とありて

をとめら之袖ふる山のみづ垣の久しき時ゆ憶寸吾者

とあると同じき歌の少しかはりて傳はれるなり○略解に乎を之の誤とせるに對して古義に

乎を之に改めしはいとみだりなり之に通ふ詞なり

といへりなほ之の誤としてガとよむべし。上三句は序其中にて又ヲトメラガソデまでの七言は布留の枕辭なり。布留山のみづ垣を久シキの序としたる所以は記傳卷二十三(一三六二頁)に

石上振社はいと上代よりの神社にて其水垣は久しき世々を経たる故に久しき枕詞にせしなり。かくて後は振山といはでただ水垣ノ久シとのみもよむは右の

歌にゆだねて省けるなり

といへる如し○結句を舊訓にオモヒキワレハとよめるを略解古義にモヒコシワレハオモヒコシアハとよめるは改惡なり。オモヒコシといはばワレヲ、ワレゾなどいはざるべからざるをや。但舊訓の如くオモヒキとよみて來をテニヲハのキの借字とせむは穩ならねば宣長の如くモヒキツワレハとよむべし

(ちはやぶる)神持在命誰爲長欲爲

千早振神持在命誰爲長欲爲

二三を舊訓にカミノタモテルイノチヲモとよめるを宣長は持を禱の誤としてカミニイノレルとよみ略解は舊訓に古義は宣長に従へり。案ずるにこゝにてはイノリシとはいふべくイノレルとはいふべからず。さればもとのまゝにて又は持在上に手の字を補ひてタモテルとよむべく命は古義の如くイノチヲバとよむべし○四五を略解にタレガタメニカナガクホリセンとよみ古義にタレガタメニカナガクホリスルとよめり。宜しくタガタメニカモナガクホリスルとよむべし。やがて君ノ爲ナラズヤといふ意なり

いそのかみふるのかむ杉かむさびで戀をも我は更にするかも
石上振神杉神成戀我更爲鴨

卷十に

いそのかみふるの神杉かむさびで吾や更更こひにあひにける

とあり○初二は序なり。神杉ノヤウニとなり。カムサビテは年イタク老イテとなり

○カムサブは神化する事なればカムサビテを神成と書けるか

何名負神幣嚮奉者わがもふ妹をいめにだに見む

何名負神幣嚮奉者吾念妹夢谷見

上三句を略解にイカバカリ名ニオフ神ニタムケセバとよみ、宣長は何名負神を何
在皇神の誤としてイカナラムスメガミニヌサタムケバカとよみ、古義にイカナラ
ム名オヘル神ニタムケセバとよめり、宜しくイカナラム名ヲオフ神ニタムケセバ
とよむべし。タムケに幣嚮奉と書けるは義訓なり○古義に名オヘル神とよみなが
ら釋には何處イカナル名ニ負ヘル神ニ奉幣シテといへり。名ヲ負フと名ニオフト

は混同すべからず

天地言名絶あらばこそ汝吾あふことやまめ

天地言名絶有汝吾相事止

初二を従來アメツチトイフ名ノタエテとよみたれど天地トイフ名といふこと釋
ならず、宜しくアメツチニワガ名ノタエテとよむべし。言をワガとよむべき事は卷
十(二一)〇五頁にいへり。又古人が名の絶えむ事を悲しむは卷二なる妹ガ名ハ千
代ニナガレムの處(三二六頁)にいへる如し。タエテアラバコソは絶エタラバコソな
り○第四句を略解古義にイマシトワレトとよめり、宜しくナレトワレトノとよむ
べし

月みれば國同山隔愛妹へなりたるかも

月見國同山隔愛妹隔有鴨

第二句を略解にクニハオナジズ、古義にクニハオヤジズとよめり、宜しくクニオナ
ジキヲとよむべし。初二の意は月ノ様子ヲミレバ異國ニハアラヌヲといへるなり

○第三句を略解古義共にヤマヘナリとよめり。ヤマヘダテとこそよむべけれ。作者と妹とを山が隔てたるなり。○愛妹を略解にウルハシイモガとよめり。古義の如くウツクシイモガとよむべし。カハユキ妻ガといふ意なり。

繆路者石ふむ山のなくもがもわがまつ君が馬つまづくに

繆路者石踏山無鴨吾待公馬爪盡

初句を舊訓にクルミチハとよめるを古義に

繆を來に借たるにて來ル道ハの意とする説は穩ならず。誤字なるべし。故考るに

繆は絲扁のあやまりて加はれるにて參にて參路者などありしにてもあるべきか。參路とは朝參の路を云べし

といへれど次なる和歌を見るに朝參の趣にあらず。さればマキリヂハとはいふべからず。なほ舊訓に従ふべし。さてその繆を契沖は繰の誤とせり。繆は旗の附屬物なり。クルとはよむべからず

いはね踏重成山あらねどもあはぬ日まねみこひわたるかも

石根踏重成山雖不有不相日數戀度鴨

第二句を舊訓にカサナル山ニとよみ古義にヘナレル山ニとよめり。舊訓に従ふべし。山がへだたれるにあらねばなり。さて初句を從來イハネフミとよみたれど石根踏は山にかゝれるなればイハネフムとよむべし。○こは前の歌の答なり。マネミは多ミなり

路のしり深津島山しまらくも君が目みねばくるしかりけり

路後深津島山暫君目不見苦有

こは吉備ノ道ノ後にて備後なり。いにしへ入海即穴海の中に深津島といふがありしにこそ。○シマラクモはシバシダニなり

(ひもかがみ)能登香山誰故君來座在紐不開寐

紐鏡能登香山誰故君來座在紐不開寐

第二句以下を略解古義にノトカノ山ハタレガユエゾ君キマセルニ紐アケズネムとよめり。まづ紐鏡は鏡の鈕に紐を通したるをいふ。而して紐を通すは手に持たむが

爲なり。略解に「臺に懸ん料なり」といへるは非なり。さてヒモカガミノトカノ山とつづけたるは契沖の説にノトカは莫解ナトカと通ずるが故なりといへり。げに此歌にてもノトカを莫解ときゝなして趣向を立てたるなり。○さて契沖の説に

紐鏡ナトキノと云山の名は誰故か。思ふ人の來たる夜、などか紐解開て寝ざらむ。と云意なり

といひ略解古義共に之に従ひたれど、もしさる意ならば紐鏡ノトカノ山トイフ名ハといひイカニカ紐トカズ寝ムといはざるべからず。案ずるに誰故を誰言などの誤寐を耶などの誤としてノトカノ山トタレカイフ君キマセルヲ紐アケザレヤとよむべし。紐アケザレヤは紐ヲトカザラメヤとなり。

山科の強田コホタの山を馬はあれど歩吾來ウツウキ、汝念不得ニオハカネテ

山科強田山馬雖在歩吾來汝念不得

馬ハアレドは挿句なり。コハタノ山ヲ歩ニテ來ツといへるなり。コハタは即木幡なり。○歩吾來を略解にカチヨリワガクとよみ古義にカチユアゴシとよめり。汝ニとあれば妹に向ひて即妹がり到り著きていへるなり。されば過去格にてコシ否キ

ツといふべきなり。○結句は略解にナヲモヒカネテとよめるに従ふべし。古義にはナヲオモヒカネとよめり。モヒカネテは思フニタヘカネテとなり

遠山に霞たなびきいとほに妹目不見吾戀イモガ目ミズテワゴコフラクモ

遠山霞被益遐妹目不見吾戀

初二は序なり。イヤトホニは久シクといふことなるべし。四五を略解にはイモガ目ミズテワゴコフラクモとよみ古義にはイモガ目ミネバアンコヒニケリとよめり。前者に従ふべし

是川ウチガハの瀬々のしき浪しくしくに妹が心にのりにけるかも

是川瀬瀬敷浪布布妹心乗在鴨

是川を舊訓にコノカハとよめるを春滿は氏ウヂ上ウヂノを是上とも書く例に據りてウヂガハとよむべしといひ谷川士清和訓栞は

萬葉集に宇治川を是河と書る所あり。前漢地理志にも其事見え後漢書李雲傳の五氏來備の注に是と氏と通ずるよし見えたり。橘氏の祖神梅宮を攝家の人の管

領するを是定といふ。西宮記には氏定とある同じ義也といへり
といひ訓義辨證下卷(四五頁)に

是と氏とはもとより通用の文字なれば今も通じかけるものとしてウヂガハと
よむべき也

といひて通用の例どもを擧げ、更に

又漢書地理志下の注云古字氏は同、後漢書李雲傳の注云是與氏古字通といへり。
これらにて是氏通用を曉るべし

といへり。されば是川はウヂガハとよむべし。○初二は序なり。シキ浪は次々に寄來
る波なり。シクシクニは頻ニなり。○妹ガ心ニノリニケルカモは當時慣用の辭句に
て妹ガ此方ノ心ニ乗ルとなり。はやく卷二に

あづま人ののさきのはこの荷のをにも妹がこころにのりにけるかも

卷四に

ももしきの大宮人はおほかれど心にのりておもほゆる妹

卷十に

春さればしだる柳のとををにも妹が心にのりにけるかも

とあり。下にも多し。就中卷十三にはオモヒヅマ心ニノリテとよめり

(ちはや人)宇治のわたりの速瀬あはずありとも後わがつま

千早人宇治度速瀬不相有後我嬬

初二は序なり。後の字は古義に従ひてノチハとよむべし(略解にはノチモとよめり)

○第三句を従來ハヤキセニとよみたれど瀬速の顛倒としてセヲハヤミとよむべ
し。障る事のあるに譬へたるなり。アハズアリトモは契りのみして未逢はざるなり

(はしきやし)あはぬ子故にいたづらに是川の瀬に裳襪潤

早敷哉不相子故徒是川瀬裳襪潤

ハシキヤシは子にかゝれる准枕辭なり。子ユエニは子ナルニなり。結句を略解古義
にモノスツヌレヌとよめり。宜しくモスツヌラシツとよむべし。河を渡りて逢ひに
行きしに逢得ざりしなり。○下にも

はしきやしあはぬ君故いたづらに此川の瀬に玉裳沾津

とあり

是川^{ウチガハ}の水^ミ阿和^ナさかまきゆく水の事^{コト}不反^{カヘラズ}思始^{オモヒソナ}爲

是川水阿和逆纏行水事不反思始爲

二三の水泡ヲサカマカセユク水ノといはむが如し。水の落つる勢にて生じたる水泡はすこし後へ戻るをミナワサカマキといへるなり。○四五を略解にコトハカヘサジモヒソメタレバとよみ、古義にコトカヘサズオモヒソメテシとよめり。宜しくコトカヘラズオモヒソメテシとよむべし。事は如なり。例は卷八にあしひきの山下とよみなく鹿の事^{コト}ともしかもわがこころづま

卷十に

春さればまづなく鳥のうぐひすの事^{コト}さきだちて君をしまたむ

とあり。ユク水ノ如ク返ラズゾ思始メテシといへるなり。カヘラズはオモヒカヘス事ナクとなり

鴨川の後瀬^{ノチセシヅケ}静後相妹者我^{ニハワレハ}今ならずとも

鴨川後瀬静後相妹者我雖不今

二三四を略解にノチセシヅケクノチモアハムイモニハワレヨとよみ、古義にノチセシヅケシノチハアハムイモニハアレハとよめり。二三は略解の如くノチセシヅケクノチモアハムとよむべし。さて諸註に初二全部を序と見たるは誤れり。序はカモ川ノチ瀬までの八言なり。即シヅケクを隔ててノチモにかゝれるなり。○卷十二に

高湍なる能登瀬の河の後もあはむ妹者吾者今ならずとも

とあり。古義に今の歌の第四句をイモニハワレハとよめるは之に據れるなり。しばらく此訓に従ふべし。○卷四に

この世には人ごとしげしこむ世にはあはむわがせこ今ならずとも
ひと瀬にはちたびさはらひゆく水の後にもあはむ今ならずとも
とあると相似たり

言にいでていはばゆゆしみ(山川の)たぎつ心を塞耐^{セキツスナ}在
言出云忌忌山川之當都心塞耐在

初二は口ニ出シテ云ハバ憚アルベキニヨリテとなり。タギツ心はワキカヘル心なり。○結句を略解にセキアヘテケリ、古義にセカヘタリケリとよめり。宜しくセキゾアヘタルとよむべし。アヘタルはコラヘタルなり。

水のうへに敷かく如き吾命妹にあはむとうけひつるかも

水上如數書吾命妹相受日鶴鴨

ワガ命は我命モテとなり。上に

こまにしき紐ときあけむゆふべだに知らざる命こひつつかあらむ

とある命に同じ。○ウケヒはこゝにては漢文の祝イハヒにぞ當らむ

ありそこえ外ホカゆく波のほかごころわれは思はじこひてしぬとも

荒磯越外往波乃外心吾者不思戀而死鞆

初二は序なり。ホカユクは外ニユクなり。本集には後世の語法にては略すべからざるニをも省きたり。即山ニカタツキテを山カタツキテといひ雲ニカクリを雲ガクリといひ心ニ戀ヒをウラゴヒといへる類なり。○ホカ心は上二二六三頁に見えた

るケシキ心におなじ。心ヲ思ハジは心ヲ持タジとなり

あふみの海おきつしら浪シラ雖不知妹所云七日ニ越來

淡海海奥白浪雖不知妹所云七日越來

初二は序なり。第三句以下は舊訓にシラズトモ妹ガリトイハバ七日コエコムとよめるに従ふべし。古義にはシラネドモ妹ガリトイハバ七日コエキヌとよめり。略解に四五は舊訓に従ひながら第三句をシラネドモとよめるは論外なり。○七日を宣長は

或人説に七日は直の誤にてイモガリトイハバタダニコエキヌ也といへり

といひ古義は全然之に従へり。案ずるに越ゆべき物を云はずしてタダニコエキヌ(又はナヌカコエコム)とはいふべからず。七日は山母などの誤ならざるか

(大船の)香取の海にいかりおろしいかなる人か物もはざらむ

大船香取海愠下何有人物不念有

上三句は序なり。この香取は下總のにはあらで近江のにて卷七に